



363
47



始



蠻勇論

363

47



蠻勇論

大正
5.12.25
内交

序

古來東洋では、「智仁勇」と並稱して、「勇」を三徳の一に數へ、西洋では智 (Wisdom)、勇 (Courage)、節 (Temperance)、正 (Justice) を四大徳として、「勇」を其一に數へて居る。といふやうな譯で、勇氣は數ある徳の中で、特に人に必要なものとして、古今東西齊しく之を重んじて居る。實に勇氣は、萬行の動力であり、成功の基である。勇氣なければ、何事も成功の殿堂に達することは出来ぬ。

然しながら、勇氣には大勇あり、小勇あり、真勇あり、虚勇あり、義勇あり、猪勇あり、君子の勇あり、匹夫の勇あり、大人の勇あり、血氣の勇あり、多種多様である。古賢は「義を見て爲ざるは勇なきなり」と云つて、一面人間に勇氣の大切なるを訓へて居ると共に、他面「暴虎憑

河死して悔なき者は吾與みせざる也。必らずや事に臨んで懼れ謀を好んで成さん者也」と云つて、匹夫の勇の慎むべきことを戒めて居る。

然らば「蠻勇」とは如何なる勇氣であるか。此語は近年の新造語で昔からある成語ではないやうだが、今日は之を悪い意味に慣用して居るやうである。即ち小勇、猪勇、匹夫の勇、血氣の勇等と略同様の意味に慣用して居るやうである。けれどもこれは果して妥當であるか何うか。勿論蠻勇の蠻の字は野蠻の蠻の字と同一で、兎角悪い聯想を起させ易い字には違ひないが、然し人間の實際生活に於て、全然蠻氣蠻力の必要を否定し得る人があるであらうか。如何に智謀に富み、才能に長ずるも、それを實行に現はす力がなくては、何の役にも立つものではないが、其實行に現はす力は、即

ち勇氣であつて、勇氣には皆若干の蠻的要素を含んで居る。真勇といひ、大勇といひ、義勇といふも、唯其勇の踴躍する動機對象が正であり善であり義であるといふ迄で、之を發揮發現する敢爲の行動其のものは、少しも匹夫の勇などのそれと異なるものではない。されば苟くも勇氣と名のつくものにして若干の蠻的要素を含まぬものは、一もないと云つてよい。従つて所謂蠻勇なるものも、其解釋如何によりては、決して擯斥すべきものではない。

若し事の正邪を問はず、手段の善惡を擇ばず、是が非でも、我意を張り、我執を通さんとする暴力妄斷を指して蠻勇といふならば、蠻勇は絶対に排斥すべきものである。然れども冷靜なる理性の判斷により、道理あることを適法的手段に依つて遂行し、決行せんとするに當りて、大いに蠻力を發揮するのは、決して非難すべきこと

ではない。蠻力と言ふと聯想が悪く、聯想が悪い爲に、兎角誤解され易いが、これを猛力と言へば、この憂なかる可く、獅子奮迅の勢と言へば、更に意味が明瞭になつて、決して排斥すべきものでないことが了解されよう。難關に遭遇して挫折せず、萬難を排して邁進する勇氣は、何人にも大に必要であり、此勇氣なくして到底大事をなすことは、殆ど不可能であるが、而も此勇氣は吾等の所謂蠻勇に相當するものであつて、蠻氣とか蠻力とかいふ要素を多量に含んで居る。唯之を發揮する目的が善でなく、手段が適法でない場合に限り、或は猪勇となり、或は匹夫の勇となりて、識者に非難せらるるを免れぬが、然らざる場合に於ては、概して腹のある人、度胸のある人、膽力の据わつた人の大氣力として瞻仰すべきものである。

孔子が「君子は勇ありて仁なきを惡む」といひ、或は「仁者は必ず勇

あり、勇者必ずしも仁ならず」といひ、孟子が「自ら省みて縮からずんば、褐寬博といへども吾憚れざらんや、自ら反みて縮ければ千萬人と雖も吾往かん」と説いたのは、眞の勇氣の仁・義・禮・智・信と離るべからざるを誨へたもので、吾等の當に服膺すべき千古の金言であるが、然し此眞勇たるや、常に蠻氣蠻力を伴ふにあらざれば、到底十分に發揮せらるゝものではない。

勇氣は何時の世にも必要であり、野蠻は如何なる時處にも卑しむべきであるが、然し勇氣と文明とは、往々にして反比例するを如何にするか。世が開化し、文明が進めば、人の知識才能は、それに従つて進歩するが、其反面に於ては、文弱に流れ、優柔に傾き、國も人も概して弱くなる傾向を有つて居る。治に居て亂を忘れざる國民が強大を致すが如く、文明を求めて而も蠻的氣象を失はざる國民

でなければ、世界に覇を唱ふことは困難であるといふも過言でない。故に文明の餘弊を矯める爲には、時として蠻風を鼓吹する必要がないでもない。稀には蠻力其のものが興國の原動力たることを認むべきとすらある。軟弱なる羅典文明に爛醉せる中世の歐洲人を覺醒したるものは、北方の森林中に遊獵を業として居たゲルマン族ではなかつたか。近世に於て最も優秀なる大帝國を建設した獨逸人は、歐洲人中最も蠻力に富んで居る民族ではなからうか。我日本が明治年間に大發展を遂げ、二度の大戦役に大捷を博したのも、畢竟我國民に獅子奮迅の蠻力がある爲ではなかつたか。

文弱に流れた藤原氏が平氏に取つて代られ都會化して水禽の音に驚愕した平氏が、田舎者の源氏に亡ぼされたのは何の爲であるか。江戸幕府が田舎武士に倒されたのも、徳川武士が都會化して、蠻力を失つた爲ではないか。

吾等は決して野蠻の氣風を鼓吹せんとする者でなく、所謂蠻カラを謳歌せんとする者でなく、又文明を咒ひ、ハイカラを絶對に排斥せんとする者でもない。吾等は唯勇氣の必要を力説し、勇氣には必ず蠻的要素の含まれ居ることを主張し、文明の進むに従つて漸次勇氣の減退する傾きあるを慨いて、極力之を防ぎ、動もすれば今日の青年の怯弱柔弱文弱に流れんとする弊風を匡正せんとするのみである。吾輩は微力ながら自ら經營しつゝある雑誌「大日本」に於いても、平素盛に此の青年剛毅の精神を養成すべく鼓吹して居る。「蠻勇論」一篇は實に吾輩の宿論とも稱すべきものである。

序
然しながら、吾輩固より一介の武弁、文筆の業は得意とする處でない。従つて本書の成る、友人松川木公君の勞に俟つ處甚だ多きことを附記して置かなければならぬ。

運子にて

大正五年十一月二十日

著者誌

蠻勇論 目次

一 人生と勇氣	一—四九
勇氣は實行の母	—
勇氣と努力	一一
蠻勇とは何ぞ	一八
蠻勇は強兵の基	二四
獨逸の強き主因の一は蠻勇に富むが故也	三一
治に居て亂を忘れず	三四
人生は是れ戰場也	三九
現世は勇者の世界	四五

目次

—

二 青年と勇氣 五〇—八二

青年は國家の原動力 五〇

愁訴は懦夫の泣言 五五

明治と大正 六二

現代青年に對する非難は是か非か 六七

ハイカラと蠻カラ 七〇

今の青年は伶俐なれども勇氣に乏し 七四

沈香も焚け、屁も放れ 七八

三 成功と勇氣 八三—一五九

成功とは何ぞや 八三

成敗の岐點 八六

必死の勇 九四

窮鼠却つて猫を咬む 一〇〇

實行の勇 一一一

逆境と勇氣 一二〇

自信と剛勇 一三七

忍耐と克己 一四五

四 冒險と蠻勇 一六〇—一五九

人生と冒險 一六〇

冒險と蠻勇 一七〇

海外雄飛と蠻勇 一八一

事業と蠻勇 一八九

五 才子と勇氣……………一九六—二二六

才子と成功……………一九六

才子の最大缺點……………二〇五

龍頭蛇尾は才子の通弊……………二一一

六 偉人と勇氣……………二一六—二六八

時代と偉人……………二一六

何人も偉人となる難きにあらず……………二二五

偉人崇拜の真諦……………二三七

偉人は皆勇氣の權化也……………二四四

七 勇氣の源泉……………二六九—二九八

勇氣の源泉としての體力……………二六九

勇氣の源泉としての知力……………二七四

勇氣は自信に依つて振起す……………二七八

勇氣の源泉としての愛……………二八五

勇氣の源泉としての徳……………二九二

八 勇氣の涵養……………二九八—三二三

勇氣涵養の好時期……………二九八

如何にして涵養するか……………三〇一

運動と勇氣の涵養……………三〇三

鍊膽の工夫……………三〇七

偉人傳の研究……………三一六

九 勇氣の發現……………三三三—三三六

人には皆獨特の勇あり……………三三三

心の持方……………三二九

善と義と勇……………三三三

一〇 勇往邁進……………三三七—三四三

守成の勇者……………三三七

進取の勇者……………三四〇

目次終

蠻勇論

海軍中將 上 泉 德 彌



一 人生と勇氣

勇氣は實行の母

射手には標的があり、御者には到着點がある。唯漫然として或は弓矢を取り、或は馬を驅つてゐるのではない。同様に吾等は徒らに時を空費してゐるのではない。人生は散歩ではなくて、旅行である。

吾等が獸類でなく、白痴でなく、狂人でないかぎり、人として理想

人生と勇氣

を有せざる者はない。百人寄れば百人、十人寄れば十人、皆夫れ相應の理想を有つてその下に生活してゐるのである。舵あつて船の進むが如く、理想あつて生活は發展する。今日は昨日よりも善く、明日は今日よりも猶善かれかしと希望し、此の希望を満足せしめんとして、吾等は努力奮闘する。かうして人間は、無限永久に進歩し發達して止まぬのである。これを國民全體として見ても、同じことで、遠大の理想を有し、これを遂行せんとする國民は、駸々として國力を増進し、揚々として國威を揚げる。我が日本が、僅々五十年の間に、有史以來の大飛躍をなしたのは、文明史上の一大奇蹟とも云ふ可きであるが、敢て此の奇蹟を實現し得たのは、種々の原因に基くこと勿論であるけれども、然し炳々として輝ける五ヶ條の御誓文に示されたる大理想と、當時の御宸翰に見えたる峻然たる

る大勇氣とが與つて大に力あることを認めねばならぬ。即ち明治元年、先帝、天神地祇に御誓ひ遊ばし宣く、

- 一 廣く會議を起し萬機公論に決すべし。
 - 一 上下心を一にし盛に經綸を行ふべし。
 - 一 官武一途庶民に至るまで各其志を遂げ人心をして倦まざらしめんことを要す。
 - 一 舊來の陋習を破り天地の公道に基くべし。
 - 一 知識を世界に求め大に皇基を振起すべし。
- 我國未曾有の變革を爲さんとし朕躬を以て衆に先んじ、天地神明に誓ひ、大に斯國是を定め萬民保全の道を立んとす。衆亦此の旨趣に基き、協心努力せよ。
- と。同時に御宸翰を下したまひ、御決意の程を億兆に示し給ひ、

「朕幼弱を以て、猝に大統を紹ぎ、爾來何を以て、萬國に對立し、列祖に事へ奉らんやと、朝夕恐懼に堪ざるなり。竊に考るに、中葉朝政變てより、武家權を専らにし、表は朝廷を推尊して、實は敬して是を遠ざけ、億兆の父母として、絶て赤子の情を知ること能はざる様計りなし、遂に億兆の君たるも、唯名のみになり果て、其が爲に今日朝廷の尊重は、古に倍せしが如くにて、朝威は倍々衰へ、上下相離るゝこと霄壤の如し。かゝる形勢にて、何をもつて天下に君臨せんや。今般朝政一新の時に膺り、天下億兆、一人も其處を得ざる時は、皆朕が罪なれば、今日の事、朕自ら身骨を勞し、心志を苦め、艱難の先に立ち、古列祖の盡させ給ひし蹤を履み、治績を勤めてこそ、始めて天職を奉じて、億兆の君たる所に背かざるなれ。往昔列祖萬機を親し、不臣のものあれば、自ら將として、之れ

を征し給ひ、朝廷の政、總て簡易にして、如此尊重ならざるゆゑ、君臣相親しみて、上下相愛し、德澤天下に洽く、國威海外に輝きしなり。然るに近來宇内大に開け、各國四方に相雄飛するの時に當り、獨り我のみ世界の形勢に疎く、舊習を固守し、一新の效をはからず、朕徒らに九重の中に安居し、一日の安きを偷み、百年の憂を忘るときは、遂に各國の凌侮を受け、上は列祖を辱しめ奉り、下は億兆を苦しめんことを恐る。故に朕こゝに百官諸侯と廣く相誓ひ、列祖の御偉業を繼述し、一身の艱難辛苦を問はず、親ら四方を經營し、汝億兆を安撫し、遂に萬里の波濤を拓開し、國威を四方に宣布し、天下を富岳の安きに置かんことを欲す。汝億兆舊來の陋習に慣れ、尊重のみを朝廷の事を爲し、神州の危急をしらず、朕一たび足を舉れば、非常に驚き種々の疑惑を生じ、萬口紛紜と

して、朕が志をなさざらしめる時は、是、朕をして君たる道を失はしむるのみならず、從ひて列祖の天下を失はしむるなり。汝億兆能く朕が志を體認し、相率て私見を去り、公議を採り、朕が業を助けて、神州を保全し、列祖の神靈を慰し奉らしめば、生前の幸甚ならん』

と仰せ給はれた。これを拜讀して、誰か感泣し感奮せざるものあらんや。此の大理想とそが遂行の大勇猛心とを知つて、猶維新の偉業を奇蹟として不思議がるものがあるであらうか。舊來の陋習を破り、知識を世界に求めんと、御覺悟は、採つて以て個人が生活の大方針となすも、猶優の優たるものである。然し理想如何に高遠なりとも、希望如何に遠大なりとも、これを實現し、これを遂行せんとする努力がなければ、それも單なる畫餅に過ぎない。畫

餅的理想は、幾何あらうとも、我を進め、他を進むることは出来ない。舵、船にありと雖も、船頭にして、櫓權を操らざる時は、假令一尺の平水も航することは出来ないのである。だから生活とは、常識的に言へば、理想實現の努力の結晶である。抽象的な胸中の精神が、凝つて具體的な實行となることである。ところが理想なるものは、原野を流るゝ水の如く、何んの障礙もなく、極々平易に實現されるものではない。一本調子に行くものではない。一番、中學へ入り、高等學校へ進み、更に大學を卒へて、天晴大學者とも大政治家ともならんと志しても、早そこに人學試験、進級試験、卒業試験、世間の試験など云ふ難關が控へてゐる。何人も何等かの妨害物に遭遇し、又迂回曲折しなくてはならない。そこで緊禪一番すべき努力が必要となつて来る。然るにこの障礙物に阻止され、難關に辟易

して、自己の努力の足らざるを責めず、やれ人生は不如意だとか、やれ浮世はまゝならぬとかいつて、愚痴や不平を漏す輩は、要するに努力の氣魄なき薄志弱行の徒か、然らずんば蝦を以つて目となす水母の徒である。人生に努力が必要なればこそ、生甲斐があるのである、愉快なのである、面白いのである。努力の要らない、歡樂の都、龍宮城へ出かけた浦島太郎は、僅か三日遊んで飽いてしまつたではないか。矢張もとの古巢の現世へ舞戻つたではないか。選抜試験といふ難關を切り抜けて入學すればこそ、入り甲斐もあれ、無試験で入つて、どうして面白いことがあらう。試験といふ一大努力の後に、暑中休暇が来るからして、一入愉快なのである。遊惰の徒は、勤勞勤勉の味を知らない。吾等は努力を尊重し、額の汗は、甘露より猶甘いことを知らねばならぬ。

吾等は、今努力の徳を褒めたゝへたが、一體努力とか奮闘とかいふことは、頭上に理想の光を仰ぎ、前に障礙を見て進むときの行動である。否、千艱萬難に行路を鎖されてゐるのを排して進み行くときの行動である。氣の弱い意志の薄弱な者ならば、一目見ただけでも、慄然として身を震はすに違ひない。折角の理想も、爲めに外に實現されずに終ることがまゝある。だから努力は、どうしても勇氣の力を借りて來なくてはならない。大西郷嘗て謂へらく、「排して行けば鬼神も避く」と。理想を實現し、希望を満足せしむる一大動力は、實に勇氣そのものである。「義を見てせざるは勇なきなり」と言はれてゐる如く、勇なきものは、義を知るも之を行ふことは出來ぬ。勇氣さへあれば、殆ど物としてならざるはなく、事として果されざるはない。「世に不可能といふことはない、不可能は

弱者の辭典にある言葉なり」とナポレオンは言つた。如何ほど善事を考へてゐようとも、勇なくんばこれを實行すること能はず、實行する能はずんば、少しも世道人心を利するところなく、夢想空想となつて、消滅するばかりである。悲しからずや、口惜しからずやである。「荆棘路に當らば、鋤きても往かん。山澤前に横らば、躍つても越えん。千艱も來れ、萬難も來れ。吾れは唯勇往あるのみ、邁進あるのみ」との勇氣が日蓮に起らなかつたならば、彼も一片の凡僧備僧となり終つたであらう。法然や親鸞は、謫處にあつても猶屈せず、熱心に布教に従つてゐた。彼等にこの勇なくんば、兩宗の隆盛、今日を見ることは出來なかつたであらう。釋尊に捨家禁慾の大勇猛心がなかつたならば、佛教は此の世の中に生れて來なかつたであらう。釋尊と同じやうな苦悶をした人に、近代の大思想

家と目されてゐる露國の文豪トルストイ伯があつた。が、彼に此の勇氣がなかつたなら、彼はあのやうに大文豪となることは出來なかつたに違ひない。如斯見來れば、實行の母は、勇氣なることが歴然とするであらう。されば古來我が東洋に於いては、勇を知仁と並び稱して、人間の三徳となし、西諺に於いても、知慮節制正義の外に、この勇氣を加へて、以て四大徳となす教がある。勇氣の必要を認むることは、期せずして東西一致してゐる。その價值の大なる固より多言を要せぬ。

勇氣と努力

抑も勇氣とは何ぞや。試に「勇む」の字義を一二の國語辭典に據つて求むるに、「氣心に満ち、心奮起して向進する心的情態」とあり、これを漢字の字引に求むるときは、勇とは猛なり、銳なり、果敢な

り、又強なりとある。つまり猛獸の如く猛く勇ましき心の力をいふのである。

またこれを英語に求めんか、勇氣に應はしきものに、courage; va-
lourの二つがある。前者はcourage(心)といふラテン語から出た言葉であつて、「危険に際し、困難に面して、心動せず、恐れず、閉がす」との意味を有し、後者はvalor(力或は價值)といふラテン語を語源とし、「恐れを排し、危きを恐れざる心の力」との意味を有してゐる。

何れにしても、勇氣とは、難に處して落膽せず、失望せず、危に面して恐れず、不撓不屈の精神に導かれ、堅忍不拔の心力を奮つて、志す標的に達せしむるものと解釋して差支あるまい。

言葉の詮議は、これほどにして、さて吾等人間の精神的方面に、これを見るときは如何。試みに、机を傾けて、一杯の水を滴して見よ。

水は重力の法則に従つて、高きより低きに向つて進むであらう。があるものは硯箱の底に浸潤し、あるものは箱に沿つて右に折れ左に曲り、遂に箱を離れて、インク壺を廻り、ナイフの下を潜り、猶ほ進み進んで、終に机の一端より滴下するであらう。人間は水ではない。賢明な自發的能力を持つてゐる。進路に横はる邪魔物あらば、これを排除して道を通じ、侵害者來らば、これに抵抗し、鬭争し、遂に擊攘して、自己の目的を貫徹し、自己の標的に達せんとする偉大な慾望を持つて居る、これを生活々力といふのである。而してこれを満足せしめんがためには、進んで止まず、斃れて後止まざる氣概がある、これを勇氣といふのである。大難に遭遇して、大勇發し、難に逢ふこと愈々多くして、勇益々加はるを常とするは、人皆生れながらにして、この勇を有してゐるからである。假令これ無

きが如くに見ゆる人でも、絶無の人皆無の人は、絶對にない。其等の人の勇は潜在してゐるのである。隠れてゐるのである。たゞ當人がこれを意識しないばかりである。窮竄却つて猫を咬むといふ諺のある如く、多少の差こそあれ、人として勇を有せざるものはない。もし人にしてこの勇なくんば、彼は一介の偶像、一ヶの木像に異らぬ。祿々として一生なす事なく、醉生夢死する憐む可き非人間である、悲しむべき弱者である。源義経は此の大勇氣を有したればこそ、西海の端に敵平氏の一族をうち沈めることが出来たのである。梶原の逆櫓論を却け、恐れて震へる船頭に弓矢を向けて威嚇し、船を狂亂怒濤の中におし進めた勇氣一つで、己に彼は敵の氣を呑んでゐたのである。山中鹿之助は、常に神に祈つていふに、「七難八苦を合せて賜り給へ」と。これだけの勇氣があつた

ればこそ、主家亡びて、領土敵手に歸すとも、屈するどころなく、同志を集めて再興を計り、よく大軍を向ふに廻はして奮闘することが出来たのである。

人間が他動物と同じく、肉體的にはある程度までしか成長せぬが、精神的には、他動物と異つて、無限に成長するのは、一に慾望と勇氣があるからである。尤も勇のみあつて、知徳これに伴はざるときは、到底満足な成長は期し難いが、さりとして勇なくんば、知と言へ徳と言へ、十分に活用することは出来ぬのである。

吾等は、人間に一大勇氣の存することを信するが故に、境遇論をば否定し、人間の意志の偉力を認むるが故に、又境遇論を否定する。「蛙の子は蛙」といふことがあるが、それは動物のことであつて、人間界に適用することは穩當でない。もし境遇論を是認するとき

は貧乏人の兒は、何時まで経つても貧乏であらねばならず賤民の子は永久に賤民階級を脱することは出来ない。しかし事實はさうでなく、大工の子も一大宗教家となれば百姓の子も大統領となることが出来る。「鳶が鷹を生む」ことは絶対になけれども、人の子は、心の持ち方一つで、偉人英雄とも聖人君子ともなり得る。されば人は如何なる不幸に遭遇するとも、悲観すべきでなく、如何なる境遇にあるとも、失望すべきでない。悲観と失望は、我が身を食ひ亡す獅子心中の蟲である、進歩の大敵である。意氣喪沮することなかれ、落膽することなかれ。「窮すれば通す」といふことがあるではないか。「七轉び八起き」といふことがあるではないか。大否定の後に大肯定が来るといふ思想家の説も、無常厭世の門から寂滅爲樂の涅槃三昧の境に入るといふ佛家の説も、この意に過ぎない。

但しこゝに注意すべき一事がある。それは「窮すれば通すのだ」し、「七轉びしても八起きだ」からと澄し込んで、施すべき策も施さず、廻らすべき工夫も廻らさず、「世の中は實に妙に出来てゐる。心配せずともよい。どうにかなる」と拱手傍觀して、成り行きにまかしてゐる淺薄なる運命論である。運命論は恐る可き説である。危険なる思想である。決して自らにしてどうにかなるのではなく、自然と困難が消滅して、道の通するものではない。凋然として頓悟するといふことがあるが、如何に傑れた禪宗坊主と雖も、一瞬間にして宇宙の大真理が悟れるものではない。そこに至る迄には、面壁九年の大努力、血のじみ出るやうな努力が費されてゐるのである。過去に費した諸々の努力が、現在の一點に集注大成して一飛躍したとき、始めて凋然として頓悟するのである。これに由

つてこれを觀れば、相當の努力を拂はねば、どうにかなつてくれな
いことが愈々確かである。「天は自ら助くるものを助くる」のであ
つて決して遊民に幸を垂れるものではない。どうにかなると高
を括つてゐる間は本當に窮してゐるとは言はれない。窮しても
窮せざる氣概あつて、始めて道は通ずる。不倒翁の如く尻に仕掛
けがあれば、兎も角も、然らざるかぎりには、幾度轉ぼうが倒れようが
起きずば止まぬ不撓不屈の氣概あつて、始めて再び起き上れるの
だ。謂はずや、「意志のある所道あり」と。また云ふ「陽氣の發する
ところ金石も透る精神一到何事か成らざらん」と。

蠻勇とは何ぞ

一概に勇氣とは言ふものゝ勇氣にも色々ある。大勇あり、小勇
あり、真勇あり、虚勇あり、沈勇あり、豪勇あり、俠勇あり、壯勇あり、武勇

あり、猪勇あり、血氣の勇あり、匹夫の勇あり、而して蠻勇も亦その一
つである。何が大勇で、何が小勇か、何が真勇で、何が虚勇かの問題
は今更説明するまでもなく、讀んで字の如くである。如何なる勇
を取つて、如何なる勇を捨つ可きかの問題も、常識さへあれば判断
の出来ることで、茲に呶々するの必要はあるまい。たゞ青年は、ど
うかすると、感情的な勇氣に驅られて、とんでもないことをし出か
す傾きがある。これは用心して慎まねばならない。感情は一時
的であつて、到底永續するものではない。だからその熱が冷める
と、まるで木から落ちた猿同様、何ごともなし得ないのである。加
之、感情の熱に浮かされて、是非善惡の辨別もなく、興奮して前後の
考へもなく一氣に事をなせば、一生取り返しのつかぬ悔を遺すこ
とが往々ある。謂ふ所の血氣の勇とはこのことで、セルビアの一

青年が放つたピストルの一丸は、獨逸の四十二冊砲を誘發して、歐洲の全土を修羅場と化せしめ、世界の人類に迷惑をかけた。戒むべきは血氣の勇である、心すべきは感情の勇氣である。

蠻勇は近來の新造語で、よく新聞や雑誌で見かける文字であるが昔からあつたのではない。而してそれがごつちかど云ふと、悪い意味に用ゐられてゐる。文明とし言へば、徹頭徹尾、善良と解され、野蠻とし言へば、一から十まで擯斥すべきものゝ如く解されて來た先入觀念のため、蠻勇も亦悪い意味に解されて、使用されてゐるのであらう。が然しかゝる觀念を追ひ拂ひ、新しき心にて味へば、蠻勇とて強ち捨てたものではない、一味の眞理がないではない。否、今日の如き時世に在つては、其精神を取つて人の生活に利用すべき必要がある。固より事の正邪を問はず、方法の善惡を擇ばず

是が非でも、我が意を貫き、我執を通さんとする暴力妄斷を蠻勇といふならば、蠻勇は害こそ來たせ利は齎らさない。吾等は之を極力排斥しなくてはならない。何となればその動機に於いて没批判であり、我利的であつて、その結果に於いては徒らに秩序を紊亂し、平地に波亂を起し、四方に敵を作るからである。假令一度は無理にも己が目的を遂げたりとも、その動機に於いて斯の如く、その結果に於いて斯の如きものは所詮砂上の建築たるを免れない。

孔子が「君子は勇ありて禮なき者を惡む」とか、「仁者は必ず勇あり、勇者必ずしも仁ならず」とか云つて、仁義禮讓の伴はざる匹夫の勇を斥けて居るのも、之が爲である。

然れども冷靜なる理性の判斷に依り、道理あることを適法の手段に依つて遂行し、決行せんとするに當つて、大いに蠻力を發揮す

るのは、決して非難すべきことではない。蠻力と云ふと聯想が悪く、聯想が悪ければかりに、兎角すると誤解され易いが、これを猛力と言へば、この憂なかる可く獅子奮迅の勢と言へば、更に意味が明瞭になつて、決して排斥すべきものでないことが了解されよう。

吾等は突進猛進して、新天地に自己の運命を開拓し、勇往邁進して自己の生活を向上せしむるを以つて、蠻勇發揮と信するのである。徒らに君子を氣取り、聖人を真似て、紳士で御座れの、一等國民で御座れのと、殊更に上品振つたり、優雅振つてゐては、個人としても、はたまた國民としても、到底競争場裡に立つて行けるものではない。「威ありて猛からざる」は、吾等の理想とする聖人君子の勇なれども、俗人には俗人らしき蠻勇で結構である。人格の光加はるに従ひて蠻勇の眞價愈々騰り、キセ君子、ヤセ聖人の文明を遙に凌

ぐであらう。

少しく具體的事例に就いて言はんには、徳川幕府の時代に、町奴、俗に云ふ俠客なるものが、一時跋扈跳梁したことがあつた。思ふにこれは町人切り捨て御免で、威張り散らした武士の壓制横暴に反抗して、江戸町民の安寧秩序を保全し、實力を以て權利を擁復せんとした町民時代精神の産物であらう。ところがこれ等町奴の徒は、徒に俠勇の美名に眩惑され、弱者を扶け強者を挫くといふ華な名前に浮かされて、ものゝ正邪も辨へず、事の理否も判断せず、唯無闇矢鱈に男伊達を振り廻はし、氣前の安賣りをしたので、中には「のみこみ屋の何兵衛」といふやうな彌次馬も出来てゐた。身命を賭しても、信義を重んずる美風は可とす可きも、信義の對象をよくも考へず、例合それが悪しからうが、飽く迄約を守つて、それがために

累を他に及し、社會の安寧を亂すも厭はずといふに至つては、感心することは出来ない。斯の如く誤られた蠻勇蠻力は、決して歓迎すべきではない。だから町奴が漸く勢力を占むるに及んでは、遂に墮落して喧嘩と賭博を唯一の生活とする無頼漢となつてしまつた。町民の味方が、町民の悪魔になつた傾きがある。それにしても、元來勇み肌の連中のことゝて、サア火事よといふ場合には、身は、火炎に包まれても、煙に捲かれても、握つた筒先は放たず、一身を犠牲にして、消防に従事してゐた。これを砲煙彈雨の戦場で、聯隊旗の下に奮闘する勇士と比較するも、その精神に於いては、毫も徑庭はない。やはり蠻力を發揮し、蠻勇を振つて善事をなせるものといふ可きである。

蠻勇は強兵の基

誰か、斯の如く力強く、斯の如く雄々しき行爲を、非文明として斥け、非紳士的として排するものぞ。天下の公道に基き、主義主張を貫徹せんとする文明人の蠻勇と、無智昧の蠻人の蠻勇とを混同してはならない、同視してはならない。前者の後者と異なる所、雲泥もたいならずである。もしこれを不可として抑壓せんか、武勇強兵は、遂に望むことは出来ないのである。戦争には常に敗北者たるを免れないのである。常に敗戦國民として、肩身の狭い生存を遂げねばならないのである。否、他國民より侮辱されても、凌辱されても、敢て反抗すること能はず、泣き寝入りにすまさねばならぬのである。今日吾等が歐米の地に遊學するにしても、旅行するにしても、何等の辱めをも受けなくて、心持よく目的を果すことの出來るのは、一つに過去に於いて發揮した我が國民の勇氣のおか

げである。日本がまだ外國に知られてゐない明治初年の頃にあつては、支那人と同視されたもので、市中を歩いてゐると、後からぞろぞろ人が追つて来て、中には石を投げつける子供さへあつたのである。然るに今日これなきは何の力か、アメリカ人やカナダ人が我を敬遠せんとしてゐるのは、果して何の力か考へてみるといふ。昔から富國強兵といふことが言はれてゐる。管鮑の交で有名な管仲が始めて唱へ出した言葉で、以來一部の爲政者にはモットとされて來たやうであるが、果してそれが實現されたことがあるであらうか、果して富國と強兵と兩立した世があるであらうか、詮する所机上の論、壘上の水練に過ぎない空想である。一寸頭の中で考へてみたところでは、國が富めば、大艦巨砲もごん／＼製造することが出来るし、飛行機とか潜水艇とかといふ新式武器も十二

分に製出することが出来るからして、兵力も自ら増大し、武威四鄰を壓しなくてはならない筈だが、事實は、全然これと反對である。國富めば大抵兵は弱くなるものである。論より證據、歴史を見るがよい。チベル河畔の一都市より起つて、全歐を殆ど統一したローマ人は、「健全なる精神は健全なる身體に宿る」と歌つてゐたが大帝國の基礎、漸く固り、外藩の朝貢、ローマに集り、民殷富に忤るに及んでは、國威次第に失墜し、號令天下に行はれざるに至つた。豪奢を極めた大浴場を作つて、市民は日夜歡樂に酔つてゐる間に、北方の蠻族は、既に侵略の刀を研いでゐたのである。一時海上に羈權を握つてゐたスペインが、今日南歐の一隅に立て籠つて黙々として眠るが如く、國力微々として振はなくなつた素因を洗ひ正せば、これも同じ事、或は東洋、或は南洋、或はアメリカに散在せる幾

多の殖民地より流入する黄金の潤澤に眩惑されて、奢侈遊惰に流れたからである。これに由つてこれを觀れば、富は國家を強くするものではなくて、却つて兵を弱くするものである。高木兼寛男であつたか、玄米を食つてゐた三河武士は、徳川幕府を創成したが、白米を常食とするに至つて、自ら倒れたといふ意味のことを言はれたが、誠に味ふ可き言である。蠻的な玄米と文明的な白米、武骨な三河武士と華者な元祿武士とを比較對照してみれば、這般の眞意が、略ぼ具體的に了解されよう。繰り返して言ふ、富國と強兵とは、實際に於て却々兩立しない。

國家の勢力は、國民の元氣にあり、元氣を鼓吹するものは勇氣である。富ではない、黄金ではない。國民に元氣さへあれば、如何なる大軍の來り攻むとも心配する必要はない。國民に勇氣さへあ

れば、如何なる強敵の來り襲はうとも、案ずる心配はない。宋を亡し、高麗を従へた元の大軍十萬餘騎を迎へて、猶よくこれを擊攘し得たのは、果して單なる神風の力であつたらうか、天佑のおかげであつたらうか。否々、然うではない。國書の辭、不遜なるを憤つて敢てこれに答へざるの元氣あり、牒辭の無禮を怒つて元使を龍の口に斬つた蠻勇あり、手兵八十を率ゐて二萬餘の敵にあたり、一族闔死してひるまざる猛勇あり、輕軻に乗じて、賊艦を襲ひ、これを燒棄して歸れる剛勇があつたればこそである。これに似寄つた實例が、明治の初年にもあつた。有名な生麥事件が突發すると間もなく、英艦は鹿兒島灣に來襲したのであるが、蠻勇を以つて鳴れる時の薩摩隼人は、禪一つに日本刀をぶち込み、小舟に乗つて巨艦にあたり、首尾よく擊退したばかりか、敵艦の碇まで分捕つた。黒木

大將の如きも、その中の一人と聞いてゐる。もし時宗にしてこの蠻勇なく薩摩隼人にしてこの元氣なくば吾等をもつと違つた歴史を有することになつたかもしれない。幸にして今日の國運を招き得たのは、一に國民に大勇氣があつたからである。國家を富岳の安きに置くは、四十二吋の巨砲でもなく、ドレッドノート型の巨艦でもない。國民の勇氣である。元氣である。されば先帝に於かせられても、勅諭を軍人に賜りて、「軍人は武勇を尙ぶべし。夫れ武勇は、我國にては、古よりいとも貴べる所なれば、我國の臣民たるもの、武勇なくては叶ふまじ。況して軍人は戦に臨み、敵に當るの職なれば、片時も武勇を忘れてよかるべきか。」と宣はせられた。

苟も勇の徳を認むるならば、大に文明的蠻勇を鼓吹しなくては

ならない。「蠻」の字は多少面白からぬ感じを與へないでもないが然し勇と名のつくものは、どんなものでも、多少の差こそあれ、皆蠻的要素を含んで居る。大勇にしる、小勇にしる、はたまた猪勇にしる、猛勇にしる、この要素を有せざるはない。就中、武勇の如きに於いては、その分量最も多い。

獨逸の強き主因の一は蠻勇に富むが故也

今日、獨逸が四面楚歌の中にありながら、猶よく敵をして足一歩も國土を踏ましめず、南、英佛白の聯合軍を威壓し、北、露國を撃破し、東、バルカンに轉じては、また英佛塞黒の軍兵を追ひ詰め、凌々として武勇を天下に轟かし、萬國の膽をして寒からしめてゐるのは、一に獨國民に遠大の理想あり、國民に旺盛なる蠻勇ありて、その元氣遙に敵國民を凌駕してゐるからである。科學の進歩、學術の發達

も亦その主たる原因であるけれども、武器戦術如何に優れて居ようとも、これを使用する軍人にして勇なくば、銃も銃たらず、砲も砲たらず、とてもあれだけの大活動は出来まいと思はれる。獨逸には今も尙青年間に決闘の蠻風が行はれ、決闘の創痕は青年の名譽とせられて居る程で、國民に蠻勇の旺盛なることはいふ迄もない。これに反して、英國を見ても、佛蘭西を見ても、國民の氣風が非常に趣を異にしてゐる。英國國民は紳士とか、紳士的を誇つてゐるが、今は早や單なる形式主義に流れて、眞意を失つてゐる傾がある。皮層な、表面的なものになつてゐる。バーナード・ショオの作に「人と超人」といふのがある。その中に出て來るラムステンといふ老紳士や、チヨーヂ・ギシングの短篇「几帳面な父」のウイストンなどといふ型の紳士は、英國通の人の話によると、ザラにあるさうだ。

これらに依つて考へても、英國國民は、保守的な進取の氣風に乏しいために發展を阻害されて、行詰つてゐるといつてよい。徒に舊習舊慣に囚へられ、新思想を批判翫味せず、これを氣嫌ひして、自由を尊重しながら、青年の自由なる發達を抑壓し、青年の蠻勇を匡めて早く小紳士に作り上げ、紳士倒れした傾きがある。

佛蘭西は、文明を以つて、世界に誇つてゐるのだが、その文明は、疾に爛熟して、今や腐敗してゐる。巴里の如きは文明の中心ではなくて、華美華麗なる流行の中心である。所謂デカダンスの本来本元である。一時ネー將軍などに現はれた大勇氣は、今や見たくても見られない。美衣美食を、文明のシンボルのやうに心得、洒落諧謔を得意として、勤勉なる獨逸人を田舎者と悪口してゐたが、今はその田舎者のために、手痛い目に會はされてゐるではないか。

歴史を見るに、所謂文明國を倒して、新國を興すものは、常に所謂蠻國である。

治に居て亂を忘れず

凡そ一國の文明が進むにつれて、其の國民の氣力は、漸次減弱し退歩する傾向がある。不健全な思想が瀰漫して、人心墮落を來し、體て國力衰退といふ段取りになるものだが、之は一體どういふ譯か。畢竟國民が物質文明に耽溺して、飽食暖衣に魂を抜かし、向上の希望を失ひ、勇の一念を忘れて、忽諸に付するからである。これを我が日本の歴史に徴しても明なことで、建國創業時代の産物たる「古事記」や「萬葉集」を見れば、實に立派な、美しい理想と、凛として雄々しい勇氣とが所々に散見せられる。それが下つて支那の輸入文明が、漸く熟して來た王朝時代になると、「源氏物語」などに

見えるが如き、優柔にして懦弱なる氣風がはびこつて、國民一般、安を偷んで、百年の憂を忘れてゐる。同じ和歌にしても、この期の作品には、とても萬葉の古歌に偲ばるゝが如き、雄遠壯大の趣は味はれない。

『治に居て亂を忘れず』とは、言ひ易くして行ひ難いことであるが然し望しいことである。而して此氣概を維持するの手段としては、國民が簡易生活を營み、大に心氣を練り、體力を鍛へ、文明の餘弊にかゝらぬようにするのが、何よりも必要であると思はれる。七六ヶ敷い理窟も思想も要るのではない、至つて行ひ易いことである。五ヶ條の勅諭にも、『一、軍人は質素を旨とすべし』と。仰せられた。算盤珠を弾いてゐる商人ではなし、劍を取つて命のやり取りをする軍人に、『質素』などは言はずともがなと思はれるが、な

かなか如何して言はねばならんことである。「凡そ質素を旨とせざれば、文弱に流れ、輕薄に走り、驕奢華美の風を好み、遂には貧汚に陥りて、志も無下に賤くなり、節操も武勇も其甲斐なく、世人に爪はじきせらるゝに至りぬべし。其身生涯の不幸なりといふも、却々愚なり云々」と續いて懇に諭されてある。比較的文明の恩澤に浴すること繁き都會よりは、曾て強兵の出でたる例のないのは、その生活華美に流れ易く、人心柔弱なるが故である。比較的文化的遅れた片田舎から、強兵の出づると多きは、その生活質素にして、氣風剛毅なるが故であらう。謂はずや、「強き兵隊は、畑より生る」と。

ビスマルクの言であつたか、今は確に覺えてゐないが、「頭は、宜しく文明人たるべく、體は宜しく野蠻人たるべし」といふ意味の言葉聞き覺えに覺えてゐる。實際、文明と野蠻とを打つて固めた

國民でなければ、今後世界に雄飛することは出来ぬ。有力強大な國家を組織することは出来ぬ。文のみあつて、武なき國は、國として獨立を全うしがたく、武のみあつて、文なき國も、亦満足に治まらず、永存すべきものではない。足利時代が戰亂で終始して、徳川幕府が十五代大亂もなくうち纏いたのは、一は文を怠り、他は文に力めたからである。とは言へ餘りに紳士的な國民は、蠻力に乏しく國力が振はない。此の意味に於いて、大に武を尙び勇氣を鼓吹し以て國家を泰山の安きに置く、常日頃の準備が必要である。況して我が國の如く、古より武を尙び來た國に於いては、猶々肝要なことと思はれる。

「よも山の、人の守りに、するほこそ、神のみ前に、祝ひつるかな、祝ひ立てつる」

「よも山の守りにたのむ、梓弓、神の寶に、今しつるかな、今しつるかな」

といふやうなことが、昔の俗歌即ち後の神樂、催馬樂にさへ歌はれてゐる位である。吾等は祖先の面目を失つてはならぬ。明治年代日本が支那に勝ち、露國に勝つと、やれ黃禍だの、やれ好戰國民だのと、非難の聲が喧しかつたが、我は曾て無名の師を起したことなく、領土的野心を満足せしめたこともない。日清の役にしても、日露の戦にしても、謂はゞ買はれた喧嘩であつたのだ。吾等は徒に戦を好む國民ではない、徒に血を喜ぶ蠻族ではない。前に引いた神樂の歌に見える通り、侵略の武器にあらずして、護國の武器である。今度は歐洲戦亂の原因が、獨逸の軍國主義に在るとして、この主義を非難し排斥するものが、歐米諸國に盛にある。がこ

れは獨逸が餘りに強いから、何とか彼とかがケチをつけるのであつて、軍國主義、必しも悪いのでない。何事も一利一害、一得一失で人間界に萬善は期し難い。現に英國の如きは、非難しながらも、徴兵制度を既に採用しつゝあるし、從來平和主義を唱道してゐた米國でさへも、陸に海に、大に軍備を擴張せんとしてゐるところを見れば、軍國主義の必要と價値を是認したものと見て、敢て不可ない譯である。固より軍國主義の目的が、弱國併呑にあり、侵略的意味にあるならば、甚だ排すべきものだが、しかし國民の元氣を増進し勇氣を鼓吹して、雄飛的な、活動的な、意氣潑刺たる國民となす尙武的意味ならば、大に迎へて勸めるべきである。

人生は是れ戰場也

大にしては世界、小にしては一家に於いても、平和は吾等の理想

である。最後の目的である。けれども人生の實際は、決して平和ではない。人間の生活から、争鬭といふことを除去するは、絶對に不可能である。萬人、悉く聖人君子なるならばいざ知らず、九千九百九十九人までが、否、萬人が萬人ながら、俗人ばかりである限り、戦争を否定することは出来ない。殊に現今の如く、國民的民族的生存競争が劇しく、國際の間に德義の重せられざる時代に於いては、猶更のことである。せめてプラト一の主張せるが如く、哲人、國政を調理するの曉に至らば、或は多少之を減少し得べく、若干平和論者を満足せしむることが出来るかも知れぬ。けれどもまだ、百年や二百年の將來には出来さうにもない。況んや國際戦争以上の人生の戦争は終熄する期の到來すべくもない。武器を取つて、血を流すことのみが必しも戦争ではない。人の命を取り、敵地

を奪取することのみが戦争と限つてはゐない。生存競争、優勝劣敗といふより以上に悲惨な事實がある。國際戦争の如きは、その一に過ぎない。この競争を、最も顯著に見せてゐるのは、戦争でなく、商業である。商業の懸引には、戰場に於ける操兵同様の苦心が費されてゐる。近代の商業界に立つて、一旗擧げようといふほどの野心家には、戰場で兵士が彈丸雨飛を恐れぬだけの氣がなくては、覺束ないらしい。昔は人間は感情の動物だと言つたが、今は勘定の動物となつてゐる。お江戸は生馬の眼を抜くと言はれたが、今は人の生膽を抜きかねまじき形勢である。とても弱い氣の者では、生きて行かれない。まご／＼して居れば、踏み潰されてしまひさうである。

これは人間同志の戦争で、所謂同族相食み、骨肉相食ふところで

あるが、これより外に人間對動物、人間對植物、人間對自然の争闘、抗争が、二六時中間斷なく行はれてゐる。同じく四海同胞を主張して、戦争を否定するならば、よろしくこれ等の戦争も否定すべきである。然るに非戦論者は、なぜこれを黙過して居るか。舊約聖書を窺うと、動物の如きは、神が人間に食物として許與されたものの如くに述べられてあるが、假令下等生物とは言へ、等しく命を此の世に享けたものである。人間に殺されんがため、食はれんがために、生活してゐるのではない。强者たる人間が弱者たる彼等を氣儘勝手に屠つてゐるのである。佛家は殺生を十誡の一つに數へて、禁じてゐるとは言へ、これを實際生活に就いて見れば、その意甚だ徹底してゐない。腥いものはいけませんが、野菜はいゝと言つた風な調子である。所謂精進がそれだ。けれども植物とて動物

と同じ生命をもつてゐるのであつて、そこに價値の高下はない。たゞ力の強弱があるのみ。非戦論者はこれをどう見るか、もしこれを否定するならば、自ら命を斷つて、ひき退かねばならない。自殺が何よりの善根功德である、何よりの慈善である。何となれば人間が生きてゐるといふことは、他を殺すといふことを意味して居るからである、殺さねば生きられないのである。言ひ換ふれば、牛馬米麥の命のおかげで、我等は其生命を維持するのである。

絶對的非戦論は、事實に於いて成り立たない。争闘の否定は百年黃河の清を待つが如く、望む可くして得られない。さりとして弱者を虐げ、弱國を屠れと云ふのではない。吾れ等はニイチエの如き誤れる超人や強人の説をふり廻はすものではない。むしろ弱者擁護を以て、强者の使命と我も信じ、人にも信じさせたいのである。

る。何となれば弱者の手を引いて、これを善に導くこと能はざるが如き強者は、眞の強者ではないからである。眞の強者は、弱者扶助を以つて、自己の喜びとなし、誇りとも感じるものである。さはさりながら、弱者は到底強者同様に人生を悦樂することは出来ない。弱肉強食の如き蠻的文明は、よろしく否む可きも、猶優勝劣敗の因果は免るべくもない。人生は斯の如く、油断のならぬ戦場であるから、人は皆奮闘力戦せねばならぬ。而して奮闘力戦するには、強力でなければならぬ、勇氣がなければならぬ。現世は天國にあらず、極樂淨土にあらず、黄金世界にあらず、半ば蠻的文明の世界である。神の國ではなくて、俗人の住處である。現世にして既に半ば蠻的文明の世界である以上、個人には皆蠻勇がなければならぬ。己に俗人の住處である以上、これに處するには、俗人の勇がな

くては叶はない。諺にも言はずや、「女は愛嬌、男は度胸」と、度胸とは蓋し勇氣の意である。更に一考すれば、女とは女々しきもの、即ち弱者、男とは雄々しきもの、即ち強者の意である。しかも社會生活の活役者は男であつて女ではない。

現世は勇者の世界

人類の理想は、世界の平和にある。しかし力あるものにあらざれば、これを實現するとは出来ぬ。東洋の國際的平和が維持されてゐるのは、力ある我國が居るからではないか。ルーズベルトは現代は勇者の世界なりと言つた。勇者とは傑れたる力の所有者のことである。力あるものゝみが、人生を悦樂することが出来る。博愛も慈悲も、勇者の餘力である。權利も正義も、力によりて保全される。人生は力そのものゝ表現である。但しこゝに云へる力

とは、兵力や腕力のみに限つてはゐない。

時代はあらゆる方面に於いて偉大なる力の人を要求してゐる。

現在の文明は、過去の偉人の勇氣の結晶に外ならない。有象無象の連中が、幾億ゐても、文明は進歩しない。ワイ／＼の連中が、何億ゐても、人生は改善されない。一人の勇者現れ、一人の偉人起れば、時代は忽ち一大飛躍をなして、長足の進歩を短日月の間になしとげる。イエスキリストといふ一ケの大人物が現はれて、新宗教を唱へると、これが爲に人類は百年分も二百年分も一時に進歩し發展する。釋迦といふ一ケの大人格が現はれて、人間の思想は、忽ち大革命を遂げしめられた。

人生は、何時の時代に於いても、何處の國に於いても、偉人英雄の出現を望んでゐる。眞に役に立つ者は、少數の非凡人であるが故

に、吾等は彼等を尊敬しなくてはならない。吾等も亦各々尊敬されるに足る人物にならねばならない。此の覺悟がなくては、假令大工左官のやうなものでも、到底立派な職人になることは出来ぬ。況してやこれより複雑にして高尚なる人生の職務に従事し、國家の中堅となり、社會の中心となりて活動せんと欲するものは、大々的覺悟こそ肝要である。

此の意味に於いて、吾等は天才教育、英雄主義に賛同する。

然るに當今、西洋のデモクラチックな思想をそのまゝに輸入して、英雄主義に反對する人がある。が西洋の民本主義は、例の自由平等の思想から分出して來たのである。もと／＼自由と平等とは、兩立しないものだし、又彼等の欲求するところは、權利上の平等のみで、義務上の平等は之を説かない、頗る蟲のよい話である。が

人間は、決して平等ではない。顔の異なるに連れて能力もまた異つてゐる。能力已に異なる、地位階級亦自ら異らざるを得ない。財産の不平等もまた免れぬ。金持を罪人の如く云ふは貧乏人の愚痴で、論ずるには足らない。然るに民本主義は、この事實を他事にして團栗の背くらべのやうに、あらゆる人間を一樣にしてしまはふとする。始めて此の主義を主張せる者は偉人であつた、非凡人であつたことを忘れて、凡夫凡俗の人間を作らうといふ。彼等はシーザー、ナポレオンの如き英雄を秩序を亂し、人民をして居を安せしめざるものとして排斥し、憎悪するが、若し彼等にしてシーザーの如き勇氣なく、ナポレオンの如き蠻力なくんば、いかで其の主義主張を貫徹することが出来ようぞ。且つまたシーザー、ナポレオンの如きは、秩序を亂しに現はれて來たのではなくて、秩序亂れた

世を統一し整頓せんとして出現したのではないか。已に秩序恢復し整頓すれば、最早必ずしも彼等を要しない。が勇者は常に必要である。必らずしも軍人肌の英雄を要すといふのではない、其種類は何でもよい。従容として毒を仰ぎたるソクラテス、悠々として十字架の上の人となつたクリストの如き大勇者であれば、甚だ渴望すべきである。しかも出でざることも久しい。第二第三のソクラテスは出でざるか。第二第三のクリストは現はれざるか。否、必ずしも望む可からざる豫期ではない。我に曾て日蓮あり、親鸞あり、大鹽平八郎あり、乃木希典あり、更に二十世紀の大英雄、明治天皇の如き大人格があつたではないか。たゞ勵む可きである、勤むべきである。

二 青年と勇氣

青年は國家の原動力

一國の文明は、鐵道線路の長さに在ると言はれてゐるが、一國の元氣は、青年に在りと信ずる。將來益々發展して行く、末頼母しき國家か、それとも早晚行詰つて頽廢すべき國家かは、其國の青年の元氣如何さへ見れば、容易に判斷することが出来る。何となれば青年は、國家の原動力で、第二の國家たるものなるが爲である。故に國家の將來は、一に係つて青年の雙肩に在る。老人は例令如何に偉らしと雖も、身己に過去の人である。國家の今日あるには、彼等の努力與つて大に功ありとは言へ、最早國家をして明白あらしむることは、前途短き彼等の出来る事ではない。日本をして日本

たらしめた者は、維新の功臣であつた。日本をして東洋の日本たらしめた者は、當時の青年今日の老人株であつた。然し日本をして世界の日本たらしむる者は、現代の青年でなくてはならない。進んで益々國威を宇内に輝すか、退いて世界の東端に安を偷んで蟄居するかは、現代の青年の腕一つにあることだ。第二第三の西郷大久保木戸、第四第五の伊藤山縣が、わが青年の間より出づるか出でざるかに依つて、日本は玉ともなり、瓦ともなる。

國家の運命は、青年の理想によつて決し、國力の消長は、青年の勇氣によりて決する。これを手近の歴史に徴するも、いと明かな事である。木戸大久保西郷等所謂維新の三傑も、當時は尙青年に近い人であつた。伊藤山縣井上大隈板垣等諸豪の如きも、皆青年であつた。其外凡そ明治年間の功勞者といはるゝ程の人は、皆當時

羈氣満々たる青年であり、勇氣凜然たる紅顔の少年であつた。今にして往時を回顧すれば、吾國の今日あるは、實に當時の青年のお蔭であると言つてよい、その勇略壯圖の賜物であると言つてよい。斯の如く青年は、常に人生の華たるのみならず、又國家の華、國力の中心ともなるべきものである。故に先輩たるものは、須く青年を尊重すべく、青年たるものは、須く自ら重じて、老若共に力を協はせ相率ひて益々國家の發展、國力の充實に努力しなくてはならない。今、日本刻下の地位如何を觀るに、これを一口に言へば、東西南北悉く敵である。最も親善なるべき支那との間さへ、餘り親善ならず、露國とは今の所表面甚だ親善の如く見ゆるけれども、之は要するに一時的現象たるに過ぎぬ、獨逸とは、今回の戦争によつて、將來の禍根を醸したといつてよい。米國は米國で、我を假想敵國とし

て軍備國防に汲々としてゐる。一日一刻も油斷のならぬ關係にある。今日の味方も、明日の敵、英國とて心は許せない。一度我國が世界の強國と己も許し、他も許してゐた露國を擊破してからと云ふものは、世界の列強は、猜忌の眼を開き、恐怖の耳を敬て、我の一舉手一投足を注視して、機會にあらば、我の發展を拘束せんとし、口實さへあらば、延び行く我の頭を抑壓せんと構てゐる。手取り早く、露骨に言つて了へば、日本を強くさせまいと云ふのが、世界の希望であるかの如く想はれる。斯の如く、我は四方八方から睨まれてゐるのである、敵視されてゐるのである、壓迫されてゐるのである。かゝる境遇の下にあつて、何處を友として頼み、何を力として據るべきか。裏反常ならざる今の世なれば、同盟國とて油斷はならず、協商國とて當にはならぬ。外の友、外の力は、頼みになつ

て頼みにならず、味方であつて味方でない。されば勢ひ、これを内に求めて、確固不拔の國力を充實しなければならぬ。國家が最後の據り所は、自己自身の實力である。實力の前に於いては、同盟も條約も一片の空文たる概がある。而してこれを内の如何なるものに求むべきか。黄金か、武力か、これ固より然り。然れども其最も頼むべきものは、我等の愛する青年の元氣である、勇氣である。されば青年たるものは、一朝事あるの日は、世界を相手にして奮戦するを辭せざる丈の度胸を常日頃より持つてゐなくてはならぬ。移民問題、人種問題、國際經濟問題等は、今後益々複雑になる。従つて對外關係は、將來益々困難となるを免れぬ。或は一度は何れかの強國を相手にして争はねばならぬ運命に遭遇するかも知れぬ。第二の國民は、よろしく一大決心をなし、一大勇氣を貯へ

て國家を泰山の安きに置くの大覺悟がなくてはならぬ。

愁訴は懦夫の泣言

敢て戦争のみとは云はず、總て國家の發展は青年の元氣に依繫するものであるから、青年に勇猛心乏しきことは、國家に取つて何よりも憂ふべきである。知らず、我國現代の青年に勇氣元氣があるか否か。如何に最負眼に觀ても、往時の青年に比すれば、元氣が乏しいのではないか。彼等は口を開けば、試験難を云々し、さもなければ就職難を訴へてゐる。實力さへあれば、何の難もないものを、さりとては餘りに女々しく、不甲斐ない青年である。事實試験や就職難を口にしてゐる青年學生は、學力もなければ、自信もなく、従つて元氣も勇氣もない弱者である。愚痴は意久地なしの世迷言といつてよい。學力優秀で確乎たる自信を有し、雄大なる理想を

有する青年は、ウンともスンとも言はないで、ズンと進むべき自己の道を進んでゐるのである。沈黙は勇氣の表象である。愁訴は儒夫の常である。力あるものは、羽根が生へて、飛んで行つてゐるのではないか。實行の勇者は、黙々として努めてゐるのではないか。云ふを止めて、修むるに勵め。入學し難ければ、學力を養へ。就職難しければ、實力を鍛へ。入學難來らば來れ、就職難起らば起れ、我に力あり、勇あり、自信あり、豈に征服し得べけんやとの意氣をなせ有しないか。これ位の勇氣をなせ有しないか。これ位の勇氣がなくては、個人としても憐む可く、國民としても頼む可からざる青年である。意氣激刺たるべき青春時代から、こんな男らしくもなない弱音を吹いて居るやうでは、將來、どうして一家眷屬を扶養することが出來よう。身を立て、一家を興し、妻子を養ふことの出來な

いやうな人間が、果して一人前の男と言へようか。國家に何を報む、人生に何を貢獻することが出来るか。日本の國內に、一人試験難を漏す學生が殖えれば、それだけ國家の元氣は衰退したのである。我等の社會に、一人就職難を訴へる青年が増せば、それだけ社會の活力は減退したのである。もし實力ある有爲の青年が、總てかゝる弱音を吐かねばならぬ程、我社會事情が不健全に逼迫して居るならば、生活難や就職難は、直に亡國の聲でなる。何となれば將に活躍せんとする第二の國民が、己に晩期に迫つた第一國民のために、要路を堰かれてゐるからである。國家の新發展は望まれないからである。

然し日本の現在は、まだ有爲の青年に、生活難を訴へさせるほど行詰つては居ない。それほど活動すべき餘地がなくなつては居

ない。開拓すべき新天地は、まだ澤山残つてゐる。社會は寧ろ大に青年の活躍を期待してゐるのである。

今から五十年前の國力に比較してみれば、版圖に於いても、國富に於いても、大に擴張せられ、著しく増大した。前者は二倍に垂んとし、後者は數層倍になつてゐる。しても尙前途益々多望、將來愈愈膨脹擴大せんとする光明が見えて居る。餘地のある限り、我は無限に發展せんと欲してゐる。今や南大洋に雄飛すべき足場も出來た。日本内地が狭まれば、外國に飛び出すがよい。西に東に、北に南に、何處にまれ、日本人の活躍すべき地盤は、已に出來てゐる。しかも我は、世界の「大舞臺」に出て、列強の間に伍してより、僅々半世紀を経たに過ぎぬ新進氣鋭の花角力である。國そのものが青年時代にゐるのである。國力の増大に於いて斯の如く、國の境遇

に於いて斯くの如き國家に住んでゐる青年が、就職難を訴へてゐるとは、何たることだ。爲すあらんとする青年ならば、かゝる時代にかゝる國土に生れて來たのを、大に感謝すべき筈である。何となれば、新進の日本國家は、新進の青年の目覺ましい奮闘を切望してゐるからである。日本の社會は、切に有爲の青年の輩出せんことを望んでゐるからである。我社會は決して彼等を壓迫し苦惱せしむるほど文明が行詰り、國力が行惱んではゐない。實力ある青年に對しては、八方から手を出して待つてゐるのである。この時に處して、苟も奮闘の勇氣と才能とを有する青年ならば、必ずや一旗擧げて、己の名をもなし、世をも益することが出来るのである。徒らに就職難、生活難を訴へてゐないで、むしろ己が力の足らざるを憂慮し、大に實力を修養すべきである。功を急がず、名を求めず

悠々として將來のために準備すべきである。三年鳴かず蜚ばずとも、一度鳴けば天下を震撼せしめ、一旦蜚べば將に天を貫く位の氣概と勇氣がなくてはならぬ。大成をなさん爲には、一度や二度の失敗に懲りず、三度や四度の蹉跌に挫けず、強い忍耐心、耐久心を以つて突進し、勇躍しなくてはならない。これには是非とも大なる勇氣と理想が必要であるから、身未だ學籍に在る頃より、心してそが蓄積に努力すべきである。勇氣さへあれば、何時でも機會を掴むことが出来る。

もし不幸にして就職に困る青年があるならば、先輩知人の間をペコ／＼頭さげて頼み廻らないで、眼を閉ぢて、靜に考へるがよい。すれば社會の形勢が明に見えて来る。就職難の泣聲は、都會のみにあるもので、田舎の叫びではないといふことが解つて来るなら

う。都會にゐなくては、出世が出来ない譯のものでもない。田舎に居つたからとて、一生埋木に終る譯のものでもない。田園に歸去來したが爲に、花咲く春もなく、朽ち果てるやうな青年ならば、都會にゐても同様、出世の出来る見込はない。國家は青年が餘りに多く都會にゐることを欲しない、寧ろ田舎に居つて貰ひたがつてゐる。國家は百人の青年が百人とも、大臣宰相にならうとするのを喜ばぬ。却つて之を迷惑に感ずるのである。寧ろ大部分の青年が地方にあつて、大に努力せんことを希望して居るのである。事實、地方は精神的にも、物質的にも、人材の缺乏を感じ、有爲の青年に望を託してゐるのである。中央集權の結果とでも言はうか人物らしい人物は、概ね東京に蟠集して、今や地方は空家同様の状態にならうとして居る。農村は荒廢し、漁村は衰微して、次第々々に

疲弊の度が高じて來て居る。此の時、花の都で、文明の新知識を吸収し、新思想に哺まれた青年が、續々地方に歸臥して、改良改善に努力するならば、面目一新して、國家は始めて健全なる發展に向ひ、大正維新が實現されるであらう。有爲の青年が、地方で活躍するといふとは、刻下の急務である。現代青年の一使命でもある。そして政治家、官吏となつて、國政を料理すると同じ名譽でもあるのだ。

明治と大正

名は、明治、大正と異れども、文明は一貫して變る所はない。しかしながら、熟々思ふに、明治一代は、政治、軍事はもとよりのこと、宗教、文藝、商工業に於いても、専ら舊文明の破壊、新文明の移植輸入に忙しかつた。が大正の新時代は、此の破壊時代の後を繼承して、これを守成し、成就せしむべき使命を託されてゐる。前章に引いた五

ヶ條の御誓文に示された大理想を貫徹し、益々其の美を發揚すべき時代である。五ヶ條の御誓文に示された理想國是は、明治時代に於いて、必しも完全に實現され、その美果が收められたとは、言はれない。もし實現されてゐたならば、今更、大正維新といふが如き新造語を叫ぶ必要もないのである。成程、明治の初期より中期にかけては、新興の勢、隆々として、自覺まじき活動が多かつたが、晩期に至るに及んでは、國民は稍慢心して、惰氣を生じ、一度や二度の戦勝に得々然として、もう大丈夫世界に恐るゝものなしと高を括るやうになつた傾きがある。所謂小成に安んずるやうになつたのである。國民の精神は鈍つて、進取の氣象を失ひ、舊來の陋習を打破せんとする勇もなく、知識を世界に求めんとの欲求も旺ならず、唯皮相極まる淺薄な、燒直し思想を瞥見して、新思想家がたり、新

人を氣取つたりして居る。これは國民生活に惰氣の生じた證據である。惰氣の生ずるのは、元氣がなくなつたからである。元氣のなくなつたのは、勇氣が衰へたからである。勇氣の衰へたのは、理想の光が曇つたからである。

これが明治の晩期から、現代へかけての國民精神の主なる傾向である。此の惰氣満々たる時代を繼承し、國家をして更に一大飛躍をなさしめんとする現代の青年は、今一應五ヶ條の御誓文を熟讀翫味して、一大勇氣を奮ひ起し、停帶期にある國民を覺醒しなくてはならない。快刀亂麻を斷つ勇氣を鼓舞して、流を堰き止む棒杭を取り除き、蘊蓄したる活力を滔々奔流せしめて、大に大正青年の面目を發揮すべきである。されば今上陛下に於かせられても、御踐祚の砌、詔勅を賜つて曰ふやう、祖宗の宏謨に遵ひ、憲法の條

章に由り、之れが行使を愆ることなく、以て先帝の遺業を失墜せざらんことを期す。

破壊に忙しかつた明治年代は、多く制度上の革新に力を注いだのであつたが、大正の新時代に在つては、その必要は比較的少くなつた代りに、其内容實質方面を大に改善し、殊に精神界に改革の斧鉞を加へねばならぬ。どうも現状を見ると、その必要がさし迫つてゐるやうである。うか／＼してゐると新しい日本魂は朽腐してしまふかも知れぬ。かゝる意味に於いて、大正維新なるものが着々として行はれなくてはならない。而してその使命は、實に現代青年の雙肩に懸つてゐる。西洋思想の輸入時代を通過した大正の青年は、純乎たる新日本精神を大成しなくてはならない。泰西文明を移植し、模倣してゐた前代を見限つて、獨創の新文明を樹

立し、世界を導く日本たらしめなくてはならない。「上下心を一つにして、盛に經倫を行ひ」以つて世界の文明に貢獻し、既往の報謝をなす可きである。受動的日本を去つて、能動的日本を建設するのである。こゝに處せんとする大正の青年は、明治の青年よりもむしろ重大なる使命を擔つてゐる譯である。こゝに活動せんとする現代の青年は、前代の青年よりもより大なる勇氣と、より賢明なる知慮と力量よりなる材能とを要するのである。守成の難は創業の難に勝るとも劣らぬ。使命が地味だから、外見には、創成時代に於けるが如き華々しきはないが、國家に對する責任に至つては、實に重く且つ大である。徳川二代將軍秀忠の周到なる頭腦と着實なる手腕がなかつたならば、家康の創業も半ば滅殺されて、三代家光の盛業は見られなかつたらう。源家三代の人物を見れば

頼朝の羈業も遂に永續しなかつた所以が思ひ知られるであらう。吾等が國家に對する使命は、家康の秀忠に於けると同じである。吾等が明治の先輩に有する責任は、大なる名譽と大なる重さを有つてゐる。あれを思ひこれを思へば、悠悠閑々としてはゐられぬ。小成に安じて、勝つた兜の緒を弛めてはならぬ。世界の文運は、日進月歩だ。豈に一人我のみ超然としてゐられようか。

現代青年に對する非難は是か非か

一部の老人はよくこんなことを言ふ、

「俺達の若い頃は、口角泡を飛ばして、天下の政治を論じたものだ。今日の青年は、机の蟲ばかりで、皆目度胸がない。天下の天の字もいふ奴は居ない。實に寒心の至りだ」と。けれども、之は餘程割引して聞かねばならぬ言で、必ずしも青年のみが悪いのではない。

第一時代が違つてゐる。時勢の青年に要求するところが違つてゐる。學業もなげ捨て、下宿屋の二階で、天下の政治を論じてゐる時代ではない。四疊半の小天地に蟄居して、大言壯語してゐる時代ではない。そんな時代は疾に通り過ぎてゐるのだ。空理空論を戦はしてゐるよりも、百姓の子なら、田でも鋤くがよい、學生なら、孜孜屹々と讀書するがよい。粗雑は創業時代を過ぎて、今は健全な固めの時代に入つてゐる。その意味に於いて、現代の青年が取つてゐる態度は、決して悪くはない、寧ろ結構である。この着實な青年の態度を見て、やれ意久地がない、やれ勇氣がないと非難するのは間違つて居る。勿論現代の青年に意久地のないのは事實である、勇氣に乏しいのは事實である。然し我等は、一部の老人の如き立場から、それを非難したくはない。一部の老人は、自己が時

代を錯誤してゐることを知らないで、徒らに粗暴な狂人じみた彼等の青年時代を、秩序整然たる今の世に再現しようとするのである。が下宿屋に籠城して、天下の政治を論ずるのが、何も勇氣のある證據にはならない。それが必しも憂國の志士の證據とはならない。『親もなし、妻なし、子なし、版木なし、金もなければ、死にたくもなし』と歌つた林子平は、足利尊氏の木像の首を刎ねた高山彦九郎を狂人だと罵倒してゐる。もし現代に、一部の老人達が欲求する明治初期の青年の如きものが輩出したならば、國家の前途は、却つて寒心すべきである。彼等は日比谷の原頭で野次り立てたり、交番や新聞社の焼打をする青年が、最も勇氣のあるもの、頼み甲斐あるものと思つてゐるだらう。高山彦九郎式の悲憤慷慨の士を、最も勇氣あるものと思つてゐるのだらう。が岡田某の如き狂青

年は、國家を亂し、國家を危くするものである。斯の如き青年には血氣の勇はあつても、眞の勇氣があるとは思はれない。匹夫の勇はあつても、大人の勇があるとは思はれない。盲目的勇氣はあつても、具眼的勇氣があるとは思はれない。時代は着實なる青年を要求してゐる。靜に勉強するがよい。

ハイカラと蠻カラ

一部の人は又現代の青年は、ハイカラだと非難する。ハイカラと云へば、獨り青年のみではない、時代そのものがハイカラになつてゐる。蓋しハイカラは文明の餘弊であらう。而してもしハイカラが邊幅を飾るといふ意味ならば、よろしく排斥すべきであるが、態度が紳士的であるといふの意ならば、決して非難すべきではない。人間は美的感情の動物だから、身分相應の服裝をなし、小ざ

つぱりとして居るのは他から見ても氣持のよいものである。勿論服裝などは、一に其人の趣味によるべきもので、一概に論斷すべきものではないが、然し小綺麗な服裝を纏ふのは萬人の好む所といつてよい。故に身分不相應の美服や、極端に華美華麗な服裝を纏つて、嫌に氣取つたハイカラは、絶對的に排斥すべきであるが、さればとて人の美感を無視した敵衣破帽の蠻風も餘り感心したものではない。破れズボンに下駄穿いて、アスファルトの上を濶歩するのが、何も勇氣ある青年と云ふことは出来ない。喧嘩を吹かけて、勝利を誇るのが、元氣のある理由にはならない。ハイカラのニヤケタ姿に比ぶれば、雄氣猶愛すべき點なきにしも非ずだが、殊更にひさぐるしき亂暴姿を誇張する必要はない。眞に勇氣ある士ならば、徒らに自己の外貌を異様に見せびらかしはしない筈だ。

身装ひを綺麗にしておくといふことは、美的本能を弄ぶことではない。また質素にするといふことは、汚くすることではない。此の何れをも誤解してはならない。野球、庭球などの運動家には、前者の誤解者多く、柔道、擊劍などの運動家には、後者の意を穿き違へたものが多い。要するに何れも不可である。ニヤケタ高襟姿も極端な蠻襟も共に宜しくない。が、青年は元氣を貴び、質實剛健を旨とすべきものであるから、ハイカラよりもまだ蠻カラの方が宜い。香油やチツクを着けて、おメカシに浮身を窶して居る優男よりも、色黒く筋骨逞しく、鐵拳一下すれば、大抵のものは倒されて仕舞うだらうと想はれるやうな頑丈の男兒の方が宜い。粗暴に陥るは戒しむべきであるが、華美柔弱に流るゝは更に戒しむべきである。

然るに現代の青年は、漸次女々しくなつて來たように思はれる。全部然りとは言はぬが、一部の青年は確かに女々しくなつて居る。人生の華たる青年には、生理的にも、はたまた精神的に、女々しかるべき要素分子のあるべき筈はないのに、事實女々しい青年のあるのは寒心すべきである。

これは文學や宗教に入つて未だ其眞髓に觸れず、その生命を解せずして、其中毒にかゝり、たゞ美とか愛とかと云ふ言葉に浮かされてゐる少數の連中のみであるかも知れぬが、然し大多數の着實な青年も、着實に過ぎて、稍々勇氣を失つた風がないではない。勿論それを以つて所謂憂國の士の非難するが如く、大正新興の青年が、精神のどん底から女性化してゐるとは云はない。唯雄心壯圖に乏しき概ありといふ迄である。必らずしも意氣銷沈してゐる

とは云はぬが、勇氣凜烈たる態度に乏しいといふのである。何も強ひて蠻カラになれといふのではないが、元氣勇氣を生命とする青年にあつては、元氣の溢るゝ所時としては鐵拳の飛ぶことあるも、深く咎むべきではない。少くとも柔弱で怯懦で、人の居ない所で、思ひ切り泣いて見たいと言ふやうな青年に比すれば遙かに優るものといつてよい。

今の青年は伶俐なれども勇氣に乏し

今の青年は、明治の青年よりも確かに伶俐であるには相違ないが、しかしその伶俐は、小伶俐たるに過ぎぬではないか。目先が見えて、利に走る弊があるではないか。小伶俐で、目先が見えるからして、損得利害の觀念が強くと、大目的に向つて、猪突猛進する蠻力が缺けてゐるのではないか。萬事に術策を弄して、以つて小功を贏

ち得んとする傾向があるのではないか。所謂交際術なるものを振り廻はして、先輩の門に出入し、其引立を受けんとするものが、今の青年中に絶無であらうか。情實を作つて、成功せんとするものがないであらうか。白粉やホーカ液が、青年男子の間に盛に賣れるといふ商賈の話は、虚言であらうか。皆空言囂言であつて欲しい。否否の聲で否定して欲しい。

要するに斯の如き一切の弊風は、現代の青年に、大なる理想が缺乏してゐるからである。大なる勇氣がないからである。此の二つは何と言つても、否む能はざる弊である、缺點である。故に我等は、本章の前半に於いて國家の現状を明にし、青年の立場を示して理想を樹つべき點の那邊にあるかを暗示しておいたのである。

明治の青年は、如何にして國を治むべきか、何によつて國政を改

良すべきかと云ふことを念頭に置いて、刻苦勉強したのである。維新の實を擧げる、それが彼等の目的であつた。大言壯言してゐたのも、一つはかゝる理由があつたからである。然るに大正の青年は、パンのために勉強して居るではないか。自己の名聞利達のために、換言すれば、金を儲けて氣樂に暮し、面白い思ひが出来ると、學業を勵んでゐるではないか。試験成績のために拮据勉強して居るではないか。どうも事實さうらしい。學問のためにする學問ならば、まだ幾多の取柄がある。しかしパンのためにする學問は、實に唾棄すべきものである。國家の進歩得て期すべからず、人類の幸福また望むべからずである。學問を學んで、それを活用するといふことは、金を儲けて、口をぬらすことではない。自己が立身榮達の手段とするのみが、學問の目的ではない。國家の

發展、人生の福利に資益する所がなければならぬ。學問のための學問も、こゝに活用するによつて、始めて一段の價值ある光輝を放つのである。博士たらんとして學に志さんよりも、有爲の材たらんとすべきである。

青年學生は、その第一歩からして、人生や國家を目標として、學道に入れよとは言はぬ、個人的欲望から出發しても差支ないが、然し最後には、蓄積したる知力學力を必ずや此の兩標的に向つて活用することを忘れてはならぬ。釋迦基督と雖も、最初から救民救世の目的があつたのではなく、自己の煩悶懊惱を解決せんがために、或は山に入り、或は野に出て、難行苦行したのであるが、最後には、自己一ケの慾望を離れて、廣く人類を救んとした。そこに彼等の價值がある。これに反して、支那特有の仙人なる者は、山に入つたま

まで、里に出て來なかつた。吾等は仙人に何等の有難さも感じられない。故に青年學生たるものは、學問の目的は、自己の慾望を充たすを以つて、足れりとなさず、更に一躍して、人生と國家のために盡すべきである。而して之を爲すには、理想に活き、眼前の小利私慾に打ち克つ丈の勇氣が必要である。

沈香も焚け、屁も放れ

明治の青年には、國家の生活を自己の生活とする理想があつた。國家と自己とが一體になつてゐる趣があつた。大正の青年にはそれが無い。それが無いから、着實になつた代りに、勇氣を失ひ、眞面目になつた代りに、意氣を無くした憾みがある。毒にもならず、藥にもならざる人間は、餘り感心すべきでない。着實なるのみが能ではない、眞面目のみが取柄ではない。青年は沈香も焚き、屁

も放る底の人物たるを期すべきである。而して沈香も焚き、屁も放る底の人物たるには勇氣が必要である。故に青年が老人の如く、無勇氣、無氣力で、元氣と氣概とに乏しいのは、他に相當取柄があつても感心しない。青年の青年たるところは、抑へんとして抑へることの出来ない、勃々たる勇氣を有する點に在る。この勇氣あるが故に、老人のなす能はざることをも、敢てなし得るのである。老人が青年に及ばない點は、唯元氣と勇氣との足らざる點のみである。故に青年から勇氣を取り除けば、老人に優る點は、殆んど一もない。

故に青年にして青年たるの價値を發揮せんと欲せば、先づ何よりも勇氣を涵養するが必要である。然らば其勇氣は何によりて生ずるか。それは前途に光明を認むるによつて生ずる。而して

前途の光明は、志あるによつて生ずるものである。パンのために學に志し、成績のために、學を勵む者には大志なく、前途の光明なく従つて意氣や勇氣の湧いて來る筈がない。理想と勇氣とは常に影形の如く相伴ふものである。理想なくんば勇なく、小志なれば小勇たるを免れず、徳なき者に眞勇あることなく、人格下劣なる者に大勇あること能はぬのである。

試験場で、教師の眼を盗んで、カンニングをしたり、コッピイを敢てする不正事件は何に起因するか。一夜でノートを暗記して僥倖を萬一に期する冒險を敢てするのは何の爲であるか。これ實にパンのために勉強し、試験のために學問して、眞に自己のため、人格修養のためになさざるが爲である。正々堂々と事を争ふことが、何せ出來ないか。正義を履んで怖れざる勇なきが爲である。

『正義を守つて、怖るゝと勿れ』とは、セキスピアの名言であるが、これの守れざるは、人格下劣なるが爲である。遠大の理想なく、その場かぎりで濟すからである。而して正義を守つて、怖れざる勇なきが故に、不正の徒に威嚇され、使喚されて、同盟休校、學校騒動などといふ事件を惹起するのである。ストライキの如きは、泰西文明の餘弊の一つで、石炭坑夫や人夫人足の輩が、利益問題のために、資本金を苦しめんとする窮餘の策であつて、知識を研鑽し、人格の向上に努むべき青年學生の倣ふべき行爲ではない。衆を頼んで、寡を苦しむるは、知者のすべきことではない。勇者は耻ぢて屑としない。若し不平あり、不満あるならば、宜しく正々堂々と開陳すべきである。異論があるならば、男らしく陳述して、是非を討究するがよい。所信を貫徹せんと欲するならば、道理ある手段によるが

よい。況んや道理を貫んが爲に、同盟休校するでなく、學校の爲を思ひてストライキをするでなく、唯自分等の我慾を充たさんが爲に之をなすが如きをや。不可能な欲求を飽迄受納せしめん爲に同盟休校し、無理の通らざりし腹癒せの爲にストライキをするが如きは、宛然土方職工そのまゝの亂行である。眞に賤むべく、笑ふ可き行爲である。赤兒の駄々か、野人の蠻行である。憲法治下の青年のすべきことではない。誠に愚の骨頂といふべきである。此等は決して勇氣の發露ではない。寧ろ正義を履んで怖れざる勇氣を缺き、又は不正に反抗する勇氣が乏しい結果である。沈香も焚け、屁も放れといひたればとて、斯る蠻行をも敢てせよといふ意ではない、理想を貫徹し、正義を實行する爲には、沈香も焚き、屁も放り得る丈の勇氣を持ってといふ意味である。

三 成功と勇氣

成功とは何ぞや

近來は成功といふ語が流行して、猫も杓子も之を口にし、之に倣れて居るやうに思はれる。大工や左官の徒でも、請合うた家が巧く建ち上るとか、或は壁が立派に塗り上るとかすれば、矢張り成功したと稱へる。成程これも成功の一つには相違ない。が我等は今少し深長の意味に成功の語を用ゐたい。

今日では成功の意味が、單に個人的物質的生活の充實、即ち富の蓄積とか、地位階級の昇進とかいふとに限られて居て、それ以上の含蓄を持つて居ない。試みに「成功の人」として世に喧傳せらるる人の實際如何なる人物なるかを考へて見よ。もし彼等が實業

家ならば成功の意必ずや竦腕を揮つて巨利を占め、一門一家の繁榮を來たせることであり、もし官吏ならば、地位昇進して、身に箔の着きたることであり、もし學者ならば、博士號を貰つた位のことである。これも亦見様に依つては、一種の成功であるかもしれない。が未だ以つて眞の成功の全部とは云はれない。一身の榮達が窮極の成功ではない、一家の繁榮が眞實の成功ではない。富の増殖も、斷じて成功の極致ではない。米國の富豪ヴァンダービルト晩年長大息して曰く、「二億の資産を支持する苦痛は人を殺すに十分である。誰か我を幸福だと云ふぞ」と。しかも蓄財の高を以つて、成功の程度を評價するは、これ現代に見る最も普通の解釋である。

中には又成功を全然人の内面に求めんとする者もある。即ち

思想家や道學者や宗教家のよく口にする人格の修養である。人間の活動を内界に限定し、高潔なる人格の創造を以つて、最高の成功となし、黄金の如きは之を賤しむべきものと解する者である。これも亦廿世紀の今日、十分の解釋とは云はれない。隱士の徳、如何に大なりと雖も、人の子を救はずんば、小學校の一教員にも及ばないではないか。俗事に齷齪たる風俗の方が、また餘程世の役に立つてはないか。「富を積むこと愈々多きに從ひ、單に金錢を愛するの念は、漸次消滅すべし」と曰つた米國の富豪カーネギーは、「金持とは蜜蜂の如きものである。その財力を使つて、甘い蜜を作り作つた蜜は、散布して同胞の食用に供へなくてはならない。富んで散布しない者は、天職を全うしない者、その罪は借りて返へさないのに等し」と説いて居る。彼の理想は、金であつて金でなく、人格

であつて人格でなく、全世界をよりよく善美ならしめんとする一念に凝つて居る。成功は、これを個人的側面より見ると同時に、社會的方面よりも眺めて評價しなくてはならない。茲に於いて、吾等は奮闘努力して有爲有用の人物となり、社會の福利を増進するを以つて、眞實最高の成功と信せざるを得ぬ。「學を修め、業を習ひ以て知能を啓發し、徳器を成就し、進んで、公益を圖り、世務を開けよ」この勅語の意こそ、自利他利の成功の眞諦を道破せるものであらう。エマーソンが「價値ある人間」になれといつたのも、畢竟この意を出るまい。これを平たく言へば自己に取つては生甲斐ある一生、世に取つては、役に立つ生活を送れといふのだ。

成敗の岐點

クリストと訓の中に、「求めよ、然らば與へられん。叩けよ、然ら

ば開かれん」と云ふ有名な句がある。苟も人として慾望なきものなく、求めざるものはない。然るにその大多數は、與へられず、開かれずして、不平悶々の中に生を送るは如何なる譯か。「志立たざれば、天下成る事なし。百工技藝と雖も、未だ志に基かざるものあらず」とは、王陽明の言葉であるが、苟も人にして志を立てずに生活してゐるものは殆どない。皆身分相應、年齢相應の志を立て、一廉の人物とならう、一仕事して自他の利益を謀らうと心懸てゐるのだが、あるものは成功し、あるものは成功しないのは、一體どう云ふ譯か。論理的に推斷すると、欲求あれば、與へらるゝに相違なく、志あれば、必ず成功すべき筈のものである。何となれば、志と成功とは、二にして實は一なる場合多きが故である。前者は意慾にして後者は意慾の直接なる具體化である。然るに成功するもの、極

めて少く、失敗又は挫折するもの多きは何に因つて然るか。

熟々成功の要素を考ふるに、知力も必要なれば、財力も無くてはならず、體力も必須なれば、徳も缺く可からざるものである。鋭敏なる頭腦を以て、世の形成を洞察し、機會を捉へるに敏なることも忽には出来ない。

人は皆さし出づるこそよかりけり

軍のときも魁をして

と、豊臣秀吉が歌つてゐる通りだ。さりとて財力なくんば、矢玉兵糧が續かず、持久戦は出来ない。知力あり、財力ありと雖も、體力なくんば、思ふ存分の活動は出来ず、随つて成功も覺束ない。智あり金あり、體力ありと雖も、徳なくんば、成功そのものに光なく、光なくば千載の後に輝くことは出来ない。しかもこれ等の諸要素よりも

尙痛切に必要を感じるは、勇氣である。勇氣の有無は即ち成敗の岐點である。例令明智あり、巨萬の富あり、絶倫の體力あり、立派に徳操ありとも、「實行の母」たる勇氣にして乏しからんには、如何にして成功を希望し成就されようか。何となれば、成功とは志を實行して得たる有形無形の結果にして、志を實行に現はすものは勇氣に外ならぬからである。茲に於いてか知る、求めてしかも與へられず、叩いてしかも開かれざるは、求め方が不十分であり、叩き様が弱いからである。求め方が不十分なるが故に、萬難を排除して遂行せんとする果斷實行の勇が、噴湧して來ないのである。求むれば、與へらるゝを待たずして、自ら撮み取らんとするがよい。邪魔立てするものあらば、突き退けて行くがよい。新井白石決意を語つて曰はく、「大丈夫の世に生る、碌々として終る可からずも

し封侯を得ずんば、應に死して閻魔王となるべし」と。以て欲求の熾烈、志の雄大なるを知る可しである。單に求むるのみで、實行に努めずんば、千年萬年經つたとて、與へらるゝ見込はない。「果報は練つて待つ」可く、「寢て待つ」可からずである。

凡そ職業の如何を問はず、勇氣がなければ成功する者ではない。政治家にも勇氣がなく、てはならぬ。主義主張に殉ずる勇者はもてはやされ、節に死守する勇なきものは罵倒される。變節漢と呼ばれるものや、黄金で買収される議員は、義勇のない斗筭の輩だ。彼等は、よろしく山陽の言を聽くがよい、曰く「士に貴ぶ所は、その節義あるを以てなり。士に節義あるは、獨り以て其の一身を立つるのみならず、一國を維持し、天下の安危を定むるに足る可し」と。この論法に依つて推すと、現在の日本は、餘り健全とは云はれない。

「天川屋儀兵衛は男で御座る」と、長持ならぬ議會の壇上で叫び得る政客が、果して幾人あるだらうか。かゝる政客に國政を委してゐる國民は、果して真に幸福だらうか。眞田幸村や木村重成は、頑として家康の買収に應せず、懷柔策に軟化されなかつたではないか。

學者にも勇氣が必要である。相當の見識もあり、優れた學力も有りながら、唯勇氣がないために堂々と所信を發表し得ないで、心にもない空言を言つてゐるものがある。權勢に懼れ、富貴に迎合して世に阿り、學を曲げる學者が、何時の世にもあるのは、勇氣のない證據である。山鹿素行の如きは、正々堂々と所信を發表する氣魄を有つて居た。ために身は捕へられて、赤穂の邊地に預けられた位である。今は言論自由の世の中である。何の權威に臆して

世に阿る必要があらうか。何の壓迫に屈して、學説を曲げる必要があらうか。

軍人に勇氣の必要なることは、今更いふ迄もない。軍人の勇氣如何は、直に國家の安危存亡に關係して来る。勇氣のない軍人は全軍の士氣を沮喪せしむる蠱毒である。營に彼れのみが軍人として、一人前になれないばかりではないのである。

實業家にも勇氣は必要である。現に實業界程生存競争の激烈なところは他にない。この中に立つて、一旗擧げようと思ふ者は商方よりも何よりも、第一に度胸がなくてはならない。浮沈盛衰の甚しきこと、實業界に如くはないからである。たゞ大なる勇氣あるものゝみが、最後の勝利を占めて、一家一門の利福を増し得るのである。三菱と言へば、今でこそ、日本有數の大富豪だが、あれで

明治の初期共同運輸會社と競争して居た當時は、すんでの事に没落しようとしたこともあるといふ。此の競争は、今日の三菱の基礎を築き上げたもので、若し其競争に堪へなかつたならば、三菱の今日は或はなかつたかもしれない。従つてこゝに處した當時の社主岩崎彌之助の決心といふものは、頗る鞏固なもので、彼が如何なる勇氣を以つて、此の競争に贏ち得たかと云ふことは、彼が調停に入つた當局大臣の前で言つた言葉に徴するも明なのである。即ち「合同する外に道がない。然し自分は阿兄の遺言を受けて、三菱の財産を保管する責任がある。故に今合同するならば三菱の出資に對して年八朱の保證を約して貰ひたい。それが出來なければ、今迄通り競争するの外はない。姑息の合同は、阿兄を辱しむるばかりである。若し私の責務を完ふする條件で出來なければ止

むを得ぬ、最後まで競争しよう。家名を汚すに忍びない。而して競争で敗れ、ば、それ迄で、持船は總て品川灣で潔く焼棄るまでである」と。彼に此の不屈の勇氣があつたればこそ、三菱は百年の安きを得たのである。

必死の勇

苟も事を成さんと欲する以上は、或程度迄、何も彼も犠牲にしてその一事に、全心全我の力を注がねば、決して成るものではない。一意専心とはこの事である。時と場合によつては、何より大事な自己の生命を捧ぐるも、猶厭はざる底の膽勇膽力がなくてはならない。かりそめにも、天下第一なり、四海に冠たらんとする大志があるものならば、常に命を的にして、活動し奮闘する位の覺悟は、言はでも有つてゐる筈である。僧の清狂、壁に題して曰く、

「男子志を立て、郷關を出づ、

學もし成らずんば死すとも還らず、

骨を埋む豈に唯墳墓の地のみならむや、

人間到るところに青山あり」

と。命を投げ出して、出来ないものは、恐らく人間世界にはあるまい。堯何者ぞ、舜何者ぞ、彼も人なり、我も人なり、釋迦何者ぞ、基督何者ぞ、彼ももとは凡夫凡俗であつたではないか。

「虎は死して皮を殘し、人は死して名を殘す」

と言はれてゐるが、虎の皮は、何時か無くなる憂がある、壞滅したり焼失したりする虞がある。しかし人の名は、不朽不滅である。人間の事業は、生命の表象である。個人的生命の具體的表現である。しかも身命は、長くとも七十八、一代にして亡ぶものだが、事業は

大小に拘はらず、萬世に互つて生きてゐる。

『咲く梅は、風に果敢なく散るとても、にほひは君が袖にうつして』

と、藤田斌は歌つた。試みに親なき人は、靜に端座して親を考へてみよ。友に死に別れた人は、瞑目して友を思つてみよ。彼等の肉體は解けて、今や影も形もないが、しかも尙彼等の精神は、諸君の記憶の中に、生々として棲んでゐることを知るであらう。失つた親と心で話し、別れた友と胸で再會して、命の不朽なることを發見するであらう。此の親、此の友は、云ふ迄もなく、生前の彼等ではなく、彼等の遺したる事業なり、功績なりである。事業は永久の生命である。これは卑小な例であつたが、世に英雄と言はれ、豪傑と稱せられてゐる人物は、これを横に廣く、縦に長くなし、遂げた迄であつ

て、その本質に於いては、わが親、わが友の我に於けると毫も異なる所はない。アブラハム・リンコーンは、夙に死んで歴史の人となつてゐるが、彼のなした偉功は、今に赫々たる光輝を放つてゐる。アメリカ三百萬の黒人は、彼あつて始めて自由解放の身となることが出来たのである。恐らく彼リンコーンの生命は、神となつて、黒人の胸に棲んでゐるとだらう。我等の親が、我等の胸中に於けるが如くに、生きて生活を支配してゐるだらう。一代五十年の生命を惜んで、不久不滅の生命に換へ得ざるものは、怯者か懦夫である。しからずんば病者である。ダイオニゼスは、『智仁兼備の士は、名を汚すに忍びず』と言つてゐる。吉田松蔭は、『身はたとひ、武藏の野邊に捨つるとも、止めおかまし、やまと魂』といつて居る。事業とは斯の如く、成功とは斯の如きものである

から、事業のために一身を犠牲に供することは、決して厭ふべきものではない。否、勇んで供すべきものである。成功のために身命を賭するは、決して惜しいことではない。否、進んで捨つ可きものである。名久井其雅の句に、

「散つてこそ惜まれもすれ櫻ばな」

といふのがある。身をすてゝこそ大功は收められるのだ。必死の勇なくんば、大事はならない。馬琴は一代の大作「八犬傳」を著作したるために、兩眼の明を失つたが、これしきのことには辟易しなかつた。子の嫁に筆を取らせ、自らこれに口授して、以つて「八犬傳」を大成した。希臘の詩聖ホーマーも亦「イリアッド」を作らんがために、兩眼を犠牲に供したと傳へられてゐる。ダンテが「神曲」をものする時は、顔色憔悴して幽鬼の如かりしと云ふ。文人畫伯

の短命に終るもの多きは、血を絞つてインクとなし、肉を刻んで繪具となし、以つて創作するからである。命を縮めて作つた彼等の作品に、凡作駄作のあらう筈がない。必ずや衆を壓し、嶄然として一頭地を抜き、藝術の最高峯に鎮座して、光榮ある生命を日月と共に傳へてゐるのである。而して斯の如き文學繪畫が、世界の藝術に如何ばかり貢献し、如何ばかりその進歩を助成してゐるか、また如何ばかり世道に利し、人心を鼓舞激勵してゐるか、歴史は吾等に代つて語つてゐる。「日本外史」や「靖賢遺言」が尊王攘夷の國論を沸騰させ、延いては明治維新の大業にまでその影響を及ぼしてゐるのを見れば、自ら首肯かれよう。事業のために投げ出した命はかくも貴く、かくも價值がある。雲井龍雄のいふに、「生きては、雄圖四海を掩ふ可し、死しては、當に芳聲を千歳に傳ふ可し。功名遠

く群を超ゆる有るに非んば、豈に喚んで真男子となすに足らんや」と。陳勝言ひて曰はく、「壯士死せずんば則ち已む、死せば、則ち大名を舉げん。王侯將相何ぞ種あらむや」と。永久に生きんとするものは、一代蜉蝣の命に關つてゐてはならない。

窮鼠却つて猫を咬む

我の戦ふ度に勝てるは、死を鴻毛の輕きに見て、一命を大君に捧げたるによる。決死の勇にあたるべき何ものがあるか。殿軍の敗將猶よく敵を食ひ止め、味方をして無事に退却せしむるは、則ち死を以て敵にあたるからである。スバルタの母は、その出陣に臨むや、激勵していふに、「楯を手にして還らずんば、楯に乗りて還れ」と。彼が武を以つて、希臘に鳴つてゐたのも道理ではないか。此の勇氣があつたればこそ、よく寡を以つて衆を制し、ペルシアの大

軍をテルモピレの嶮に支へ得たのである。人は命を投げ出してかゝつた時には、自己の力量以上のことが出来る。生命を賭して向つたとき、眞に「人力の自在」なることを會得する。靈妙なる力の働きに、我ながら驚嘆する。「窮鼠却つて猫を咬む」と云ふが如きも、要するに必死の勇、よく大敵を退け得るを意味するのではないか。獸類に於いてさへ猶然り、況んや人間に於いてをやである。昔の兵法に「背水の陣」といふのがある。云ふ迄もなく、後に河水沼澤を控へて、退くに退けない陣形のことである。外的に言へばかうだが、これを内的に見れば、戰士皆死を期して敵に當り、進んで退かざる必死の決意、凜として侵すべからざる勇壯の對陣をいふのである。だから大軍とて容易にこれを抜くことは出来ない。ナポレオンに侵略された露軍は、意を決して舊都に火を放ち、散々

に敵をうち惱まして、首尾よく撃退した。窮鼠の猫を咬んだ實例である。されば人の援助を受けず、正々堂々と實力一つで世に處し、獨立自助奮闘努力して、事を成し、以つて永久の生命、不朽の名に生んと欲する者は、宜しく背水の陣を張つた兵の心持で、死を期して健闘すべきである。

正平二年十二月のこと、賊將足利高氏の將高野師直は、弟師泰と共に六萬の大軍を率ゐて南朝を攻め、一舉にして之を蹴破らうとした。吉野の行宮、暗雲に閉されて、主上の御惱一方でない。此の時、南朝の忠臣、楠正行は、年齢僅に二十二の若武者であつたが、奮然として死を決し、以つてこの大敵にあたらんとて、先づ行宮に詣り奏していふに、「臣、父の遺命を奉じ、黨族を糾合し、日夜、朝敵を平ぐるを以つて、事と爲す、然れども、不幸にして多病なり。若し一旦、病

を以つて死せば、上は不忠の臣となり、下は不幸の子と爲らん。方今、師直、師泰來り侵さんとす。これ實に、臣が報効の秋なり。若し彼の首を獲ずば、則ち臣等兄弟の首を彼に授けん。雌雄の決、此の一戦に在り。願くは、一度龍顔を拜し奉りて去らん」と。それより御所を退出して、後醍醐天皇の廟を拜し、こゝでも一死報國の決意を明にして、「戦、もし利あらずんば、生きて還らじ」と。そこで弟正時、和田賢秀を始めとし、同じ誓ひの一族郎黨百四十餘人の姓名を、如意輪堂の壁に刻し、其の後に題して、

「返らじと、かねて思へば、梓弓、なきかずに入る、名をぞ留むる」と、辭世の歌を書き識したのである。此の決意を以つて、正行は、手兵三千を率ゐて、四條畷に奮戦し、大に師直の兵を敗つた。が天は此の忠勇無二の若武者に與みしたまはず、一度は本營を突いて、斬

り崩し、僞りながらも敵將師直實は上山高元の首まで擧げたのであつたが、衆寡敵せず、身に數箭を受け、弟と刺し違へて戦場の露と消えに。生還を期せずして戦つたから、彼もこれだけの奮闘が出来たのである。

保元の亂に、後白河天皇は關白忠通を始めとし、宗徒の公卿を禁中に召して、軍の評定をなし給ふたが、何がさて、櫻かざして遊ぶ術は知つてゐても、弓矢を取つて戦ふ手立には皆目疎い先生達のことだから、衆議紛々として決しない。この時源の義頼、召しに應じて参内し、夜討の策を申上げた。すると天皇は、「汝、親を捨て、義に趣く。其の志嘉みすべし。授くるに大將の任を以てせん。忠勤あらば、他日、昇殿を許し、請ふ所を與へん」と。義頼奏していふに、「武士の戦場に趣く、何ぞ餘命を期せん。願くば即今、昇殿を許し給

へ」と。總大將の彼に此の勇氣あり、戦死の決心あつたればこそ、白河殿も一夜の中に灰燼に歸し、味方の大勝利となつたのである。生死の問題を論外にして、たゞ如何にして勝たんかとのみ工夫する者が、最後の勝利を占めるのだ。

平治の亂に、熊野詣をしてゐた平の清盛、變を聞いて、急いで京師に引返さうとしたものゝ、敵の部將源の義平が三千騎を率ゐて、阿部野に待ち伏せしてゐると聞き、俄に怖氣立つた。義平は、當時武名を以つて關東に鳴り、「惡ノ源太」の字を取つてゐる猛將であつた。「此の百騎ばかりでは、とても源太の大軍に當ることは出来ない。みすく殺されに行くやうなものだ。でこれから直ぐ四國に渡らう。四國は父祖以來の根據地だから、集つて来る兵も多いに相違ない。先づ徐に兵を募つて、それから都へ攻め上るとしよ

うと浮足立つて早口にいふのを遮つた長子の重盛、「四國に渡つて早速兵が集れば兎も角も大軍を募るは却々容易のことでない。ぐづぐづしてゐると敵は上に強請して、平家追討の勅旨を下すに遠ひない。さうなると當家の一大事、味方の不利益是に如くはない。源太とて、よもや鬼神ではあるまい。まつた兵が少いからとて、必しも負けるものとは限らない。よしんば負けたにしても敵は大軍、味方は薄手なれば、武門の耻辱ともならない。むしろ潔よく進み向つて、綺麗に討死し、芳を後世に残す方が得策である」と建言した。清盛即ち重盛の言を入れ、決死の勇を鼓して進み、阿部野に行つたが、敵軍の旗印はおろか、兵一人の影も見えない。源太待伏せ云々は風聞に過ぎなかつたのである。もし此の風聞を信じ臆病風を吹かして四國に渡つてゐたならば、平家後來の榮華は夢

にも見られず、後世のいゝ物笑ひになつたであらう。幸ひにしてこれなきを得たるは、一つに重盛が勇氣のおかけである。

又義經が戦ひ振りを見るに、何時も決死の覺悟を有し、必死の勇を奮ひ、自ら陣頭に立つて、將卒を激勵したことが明かである。彼は四國の平氏を襲撃せんとて、攝津の濱より打つて出んとした。が生憎く海荒れて浪高く、夜暗くしてもものゝ黑白も分らない。箒を取り巻いて皆モチ／＼してゐる。義經大喝して曰ふよう「進んで死せんとするものは、われに従へ、退いて生んとするものは、われより去れ」と。畠山重忠卒先して従ひ、立ち所に來り集るもの百五十騎に及んだ。一夜の中に阿波の尼子の浦に押渡り、奇兵を放つて、敵の不意を衝いたのであるが、此の簡にして嚴なる軍令に、彼が武將としての面目が躍如としてゐるではないか。彼はこの勇を

以つて、平家追討の大難事に成功し、兄頼朝の覇業の大半を助成したのである。思ふに義経ほど花々しい戦争をした偉い武將は、恐らく外國にもあるまい。これは彼が心中常に必死決死の勇氣に充ちてゐたからである。

事を成さんとする者は、先づ命を投げ出してかゝるがよい。然らば成功は疑ひない。大功を立てんとするものは、須らく命を棄て、かゝるがよい。然らば歴史はその數頁を割愛するであらう。

吾等は、斯の如き決死の勇者に、絶大の名譽を與へるを惜まない。吾等は、かくの如き必死の奮闘家に、至上の尊敬を拂ふに躊躇しない。吾等は、口を極めて、彼等の成功を讚美し、彼等の事業を謳歌して止まないのである。吾等が、今日、乃木將軍に對して、殆ど神の如き崇敬の念を捧げてゐるのは、何に因るか。將軍が立てた旅順の

戦功か。否、戦功にかけては、他に將軍に優る人がないでもなからうし、肩を並べる人は幾人もあるであらう。而も猶それ等の人以上に、殊に將軍を讚美し、敬慕するは何故か。將軍が身を殺して、以つて至誠を一貫した潔い行爲の爲ではないか。此勇ありて、始めて難攻不落の旅順を陥れることが出来たのである。これを二兒を失つて、『冢兒よく死せり』と豪語した勇に歸する者あらば、そは本末を轉倒した解釋だと言はざるを得ない。

吾等がクリストを畏敬するは、人の子のために、敢て十字架に上つた犠牲の勇ではないか。吾等がレオニダスを讚美するは、彼がテルモピレの戦に、孤軍奮闘して、希臘全土のために、身命を捧げた、獻身的勇氣ではないか。吾等が一命の武人廣瀬中佐を軍神とし

て銅像を萬世橋畔に建て、以つてその英姿を仰ぎ、その遺風を追慕するは、旅順港口に壯烈な最期を遂げた彼の決死の勇ではないか。志士義人は、身を殺して、以つて仁をなすものである。「英雄は危難に逢ひて、志益々堅きこと、猶香氣の碎かれて、益香氣を發するが如し」である。見よ、蠟燭は自己の本體を亡して、以つて光明を放つではないか。蠟燭にして燃ゆることを厭はんか、蠟燭の蠟燭たる面目を發揮するとは出来ない。自ら亡びることを知らざれば、終に偉名を輝すことは出来ないのである。維新の兵家大村益二郎は、斯の如き句を咏んだ。

「散りて後、身に功はあり、梅の花」

と。山家集で有名な西行法師は、僧族ながら、元が元、斯の如く咏んだ。

「惜むとて、今まではよも、永らへじ

身をすて、こそ名は残りけり」

と。淨瑠璃の作者として、文名今に噴々たる近松門左衛門は、斯の如く歌つた。

「それ辭世、去るほごさても、その後

残る櫻の花しにほはよ」

と。即ち知る、我等が、ある個人の成功を讚美し、その事蹟を仰いでゐるのは、實はその人の人格、人格中の勇氣、勇氣中の必死の勇、犠牲の勇なることを。

實行の勇

苟も志あつて、これを遂行するに必死の勇を以つてするならば、何事か成らざらんやであるが、しかも世間には、出来ない叶はない

と始終弱音を吐いてゐる者が多い。得られない／＼と絶えず愚痴をこぼす人がある。ナポレオンをして言はしむれば、「我は得ず、我は知らず」といふは愚人である。」

熟々考ふるに、出来ないのではなくて、進んでしないのである。

「とても俺には叶はない」としないうちから怖氣立ち、自ら見くびつて、敢て着手しようともしないからである。斯の如くば、志望如何に雄大なりとも、一片の空想に過ぎない。企圖如何に壯大なりとも、一個の妄想に外ならない。吾等はこれを目して誇大妄想といふのである。

『爲せば成る、爲さねばならぬ、成るものを』

成らぬといふは、爲さぬなりけり』

といふ歌の通りで、『能はざるに非ず、爲さざるなり』だ。今日出来

ないのに、明日になつて出来る筈はない、否、今日なさなければ、永久に成就しないのだ。然るに「明日は／＼とて暮にけり」で、ぐづら／＼と遊ぶでもなく、勤めるでもなく、曖昧な月日を送つてゐる優柔不斷の徒に、何の成功が望まれようぞ。第一なすべきことをなさなければ、心不快にして、終日何事も手につかないではないか。これを一日とすれば、僅か二十四時間だが、一ヶ月と限つて、『來月は／＼』としてみよ、瞬く間に一年は過ぎ去るではないか、これを一ヶ月としてみよ、十年は忽ちにして過ぎ去り、時は悔いを残して行くばかりではないか。更に少年の時に、青年となればと夢み、青年の時に壯年となればと延ばし／＼とてゐたならば、何時の日になつて果して成功の暁が見られよう。若き朝日の昇る時は、希望の光を放ち爛々として四海を睥睨してゐるが、志の夕陽の傾かんとするとき

は徒に日暮れて道遠しの歎を發して、苦悶懊惱しなくてはならぬのだ。青雲の志も果すこと能はずして、轉軻不遇に泣く身となるのだ。市井坊間の老人の口癖は何か、「今十年も早く氣がついたら、こんな様には成つてゐなかつたらうに」といふことだ。實行の力なきかゝる輩が、例令十年二十年早く氣付うが、悟らうが、五十歩百歩だ。大した成功は出来るものではない。澤庵和尚誠めて歌ふやう、

「とやせまじ、角やせまじと思ひつゝ、

今年も今日をかぎりどぞなる」

と。出来る、出来ぬは問題である。する、せぬは解答である。問題を何時まで論議してゐても、解決はされない。これを解決するのも、は、二本の腕である。即ち實行である。能不能の問題を頭で捻く

つてゐるのは、洞察の明なく、知見低きによると雖も、一にはまた果斷決行の勇がないからである。これを分析するとかうなる。知見暗きが故に、決斷すること能はず、決斷すること能はざるが故に、實行すること能はず、實行すること能はざるが故に、知見を高めることが出来ぬ、随つて永久に決然として斷行する勇氣が湧いて來ないのである。知識はあつても、これを實行に現はさなくては、有も無に等しい。よしんば實行に着手することも、これを遂行し完了する勇氣に乏しければ、爲るもせざるも同じことである。例へば「論語」を讀まう／＼と思つてゐながら、雑事に手を取らるゝまゝに取られてゐて、思ひ切つて讀みにかゝらねば、「論語」は無いのも同じだ。縦令讀むにしても、これを最後の一章まで讀破するにあらずば、讀まざるに等しい。

實行は知識の花で、知識は實行の根元である。「學んで後に行ふことを知ると云ふ」と、孔子は道破してゐる。「知らずば行ふこと能はず、知つて行はざれば耻あり」と、王陽明は叫んでゐる。故に吾等は、經驗の前に立つて、これを忌避し、回避して實行せざる者を、一種の罪人であると思つてゐる。何となれば、天は吾等に使用せよ、實行せよとて、諸種の能力を賦與してくれたのであるからだ。例へば賢者として行はざれば、愚人に等しく、聖者と雖も、凡夫と異なる所ない。「事は爲さずして有るべからず」とは、スコットの名言であるが、實際自己が如何なる能力を有してゐるか、如何程の力量を具へてゐるか、事にあたつて行はずんば、遂に知ることには出來ないのである。「經驗は、最良の教師」といふ西諺がある。然るに何とか彼と物理窟をつけて、やれ難しいの、やれ望ましくないので言ひ逃げて實

行しない徒は、到底何事にも成功することは出來ない。こゝに於てか、實行の勇なき者は、耻しや、自己自身を知ることが出來ず、従つて成業すること能はずといふことになる。

「出來ない」と漏す人間は、一體どんな事をしてゐるのかと見ると、必らずしも、

「折々に遊ぶ暇は、ある人の

暇なしとて、文よまぬ哉」

でもないが、然し概していふと、自己の力を計らずも、こゝに出來ない事に、手を出してゐる者が多い。自己を知らずして、力量以上のことに従事すれば、たとひ前項で説けるが如き、必死決死の勇を揮つて奮闘しても、骨折り損の疲れ儲けに終るは、必定で、所詮成功は期し難い。人間には、「阿呆にも一藝」の諺がある通り、各人獨特の

天分がある。他人の容易に及ぶことの出来ない天分がある。この天分のある所に向つて、勇往邁進すれば、成功しないといふことはない、出来ないといふことは、絶対に存在しない。自己を知るといふ中には、此の天分を自覺して、實行するとの意味が含まれてゐるのである。されば何人も機會ある毎に試みるがよい、苦しからうが、難しからうが、避易してならない。これを苦しとし、これを難しとして、實行するの勇なくば、遂に己が能力を知ることには出来ない。ナポレオンの如き偉人すら、己を忘れて、力量以上のことに手出したのが、身の破滅となつて、絶海孤島に悶死しなくてはならなくなつたではないか。エマーソン訓へて曰く、「各人は特長を以つて生る、故に他の何人の難んずる所も、己は容易になし得可し。故に我は言ふ、請ふ汝が天與の任務を盡せ」と。ところが、此の特長

を唯一の武器として、獨特の事業をするといふことは、非常な勇氣がなくては出来ない。發明家の傳記を見ても明なるが如く、模倣は易く、獨創は難い。創造は常に苦しい。しかも其易き模倣は、成功の大敵である。何となれば、模倣は暗中摸索して、頓挫蹉跌する虞なしと雖も、遂に自己獨特の天分を殺し、天賦の能力を滅殺して、手本以上に出づること能はず、第一等の人たること能はざるが故である。故に新路を開拓する勇なき者は、常に人眞似をして、次位亞法にうろついてゐる。吾等は、これを屑しとしない。勇者の耻辱として斥けたい。見よ、天に二日なく、地に二箇の同人なし。西郷の前に西郷なく、伊藤の前に伊藤はなかつたではないか。然らば彼等は誰を眞似し、誰を模倣して、今日世に謳はるゝ人物となつたか。西郷は西郷自身、伊藤は伊藤自身を眞似したのだ。乃ち自

己自身の天分獨特の力を發揮したのだ。獨立自助、勇往邁進し、大勇を以つて大難を切り抜け、漸くにして西郷となり、伊藤となつたのである。これまた彼等が難關を回避することなく、機會ある毎に自己の能力を實施して、練磨したる結果ではないか。

實行の勇者は、常に新路を開拓し、實行の勇なき者は、常に人真似をしてゐる。前者の成功は、眞の成功といふべきも、後者の成功は、彼自身の成功といふことは出來ない。

逆境と勇氣

人間界のことは、何事によらず追手に帆かけて、靜穩な内海を航するやうに成就するものではない。暗礁もあれば、淺瀬もある。嵐も吹けば、浪も荒れる。却々樂に乗り切れるものではない。しかもこれを無事に乗り切るものは、勇の徳である。而して世の様

を見るに、所謂逆境こそ、その常相であつて、順境は唯稀に見る現象のみと言はねばならぬ。人生が若し儘になるならば、勇氣の何のと云ふ必要はない。されば人には、常々逆境に處する覺悟、これを凌ぐ力儘にならぬを儘にする勇氣がなくてはならない。ロッキフロードと言へば、十五億の富を有するアメリカ第一の大金持だが、もとを洗へば、田舎百姓の倅であつた。此の人が往事を回顧して、「余は當時幾多の野心を懷抱してゐたが、此の野心を遂行せんには、大々の勞苦を思はなくてはならんと覺悟した」と言つてゐるのは、彼が人生の旅路に上らんとした時の覺悟を示し、其の後の奮闘の様を偲ばせ、今日の成功の因が那邊に存るかを語るものである。太田錦城亦、誠めていふやう、「人身を立てんと欲すれば、勞苦の事をして、勞苦の家に入る可し。もし樂む可きことをして、樂む可き

家に入らば則ち亡ぶ可し」と。大功を立てんとするものは大難に勝つ勇氣がなくてはならない。此の勇氣もない癖に、大事を欲するは、恰も蟻螂の鎌を以つて龍車にあたるが如きもの、一敗して地に塗るゝことは、瞭々として火を見るよりも明である。故に大成功をなし、男子一代の面目を施さんと欲せば、進んで大難にあたらなくてはならない。貴重なる物品を製作せんには、高價なる努力が必要であるのと、同じ理窟である。然れば人は逆境に逢つて逡巡してゐてはいけな、困難に際して躊躇してゐてはならない。「磐根錯節に會はずんば、以つて利器を分つ由もない」蕃山、既に歌はずや、

「うきことのなほ此の上に、積れかし

かぎりある身の、ちから試めさん」

と。しかも艱難は人を虐待するのではなくて、人をして玉たらしめんとするのである。一難を凌ぎ、一艱を迎ふるたびに、人の能力は、層一層増大し、人の勇氣は、益々強烈になるのである。正宗の銘刀も砥石にかゝらねば切れないではないか。「艱難は蟾蜍の如く其の容貌醜惡にして、且つ毒氣を包含するが、頭上には寶玉を戴いてゐる、これを利用して愉快である」と、セキスピアが名句を吐くと、ベーコンが、「艱難の中にも快樂の希望がある」と、元氣のいゝことを言つてゐる。爲しがたきを成してこそ、眞の成功である。冒し難きを冒してこそ、眞の偉業である。易々樂々として得た成功に、何の光輝があらう。「我は能く難に處して、成し得たり」と思ふ時「人のなし得ざることをなし得たり」と顧る時、何を以つてしても代へることの出来ない満足と喜悅とが、胸に溢ふれて、顔に浮ぶの

である。何ものも奪ふことの出来ない面目と誇りとを感じるの
である。これこそ獨り成功者のみが味ひ得る喜びである、彼のみ
が貰ひ得る報酬である。乳母日傘で育てられた幸運兒には、到底
味ふことは出来ないのである。貧乏な不運兒に特有の賜物であ
る。斯く見來れば、富者の子、必しも幸福でなく、貧者の子、必しも不
幸ではない。依つて吾等はいふ、順境喜ぶべからず、逆境悲しむべ
からずと。事實、成功者は貧兒に多く、富者の子に少きを知らずや。
カーフィールドは、『貧窮は、青年が父祖より繼承すべき遺産の至福
なるものである』といひ、カーネギーは、『貧しき人は幸福である。
成功の天國は、極貧の者が、先づこれを得る』と誨へてゐる。

然らば何が故に貧兒に成功するもの多く、富豪の子に少いので
あらうか。思ふに前者は、難に處して己を磨き、膽を鍊つて勇を貯

ふる機會多く、時一度至らば、奮然として發憤し、百の勇を鼓して、奮
闘するからである。常に自己自身の力に信頼し、勇氣に據つて、他
の何ものにも依頼しないからである。早い話が、病氣になつても
碌に薬も飲むことが出来ず、天與の力を以つて、これを撃退しなく
てはならない。時には弟や妹の面倒も見なくてはならない。早
くから困難と戦つてゐるのである。ところが富者の子となると
兎角、柔弱になり易く、無能の輩になり易い。一寸感冒にかゝつて
も、醫者よ、薬よの大騒ぎで、荒い風にもあたらない。かうして世の
辛酸に對する心の抵抗力を弱らせてしまふのだ。つまり力行す
べき機會が少いからである。人間が發憤して起つと、恐しい勇氣
が出る、恰も壓搾されてゐた蒸氣が、隙間を見付けて噴出するやう
な勢を有つてゐる。日頃重くて持てない器物でも、さア火事だと

云ふ時は、輕々と引提げることが出来る。同様に貧者の子が腕一本、脛一本で、常人の及ばざる成功の絶頂に、名譽の旗を翻し得るのは、實にこの發憤の勇に因るのである。カーネギーが、今日世界第一流の大金持になつたのも、亦この勇氣の所爲である。

カーネギーが、まだやつと十一二になつた頃であつた彼の父は工業界を革新した蒸氣機關の發明に會つて、破産の悲運に際した。ある日のこと、最後の製作品を得意先に渡して來た父は、滿面生色を失ひ、氣力全く衰へて、悄然として宛ら幽鬼の如くであつた。『もう注文を受けることも出来ない。これからする仕事もない』と、歎息しなから言つた時は、一同黯然として、互に顔を見合はすばかりで、云ふ可き言葉も知らなかつた。悲しむべし、彼の家は貧乏のどん底に落ちたのである。この時彼もその座にあり、此の語を聞き

この悲劇を見、苦しい父母の胸中を推して、斷腸の感、悲憤の念に堪へず、切齒して思ふやう、『たとひ此の身は碎けて、粉となることも、必ず貧窮の豺狼を永久我が家門の外に逐はでは止まぬ』と。彼が驚く可き成功の原動力は、この一瞬の激憤にあつた。奮起こゝに發し、勇氣こゝに勃發した。されば人生行路の難は、固より期する所如何なる困難も、如何なる辛勞も、皆これ成功に達すべき當然の階梯に過ぎなかつた。十二にして一會社の給仕となり、以來奴隸の如き苦役に服したこともあつた。地獄の如き慘境にも入つた。が何ものも彼の猛勇を挫くことは出来なかつた。成功の天國に達するは、彼の大望である。苟も此の大望を成就する爲めには、如何なる困難も、平然として、これを迎へ、如何なる辛苦にも、欣然として服するは、固より覺悟する所である。困難に挫け、境遇に臆する

は、懦夫のする處、丈夫一代の耻である。後年、「笑つて艱難を切り抜ける勇氣がなければ、成功は期し難い」といふ意味のことを豪語してゐる。眞にカーネギーでなくては言はれない言葉である。不運にして、しかも幸運なる貧兒よ、逆境裡の青年よ、歎く勿れ、呪ふ勿れ、天は諸君に至大の幸福を垂れてゐるのだ。天は貧しきものに向つては、富を得よ、低きものに向つては高く上れよと命じてゐるのだ。天が諸君に禍をなすのは、天未だ諸君を見棄てざる證據である。親が道樂息子に意見する間は、未だ彼を見限つてゐないのである。天は禍を以つて諸君の力を試めしてゐるのである。此の試験に及第した者のみ、成功の月桂冠を貰ふことが出来るのだ。起つがよい、振ふがよい。徒に女々しい涙を流してゐる場合ではない。不運と逆境は、人生の九部を占めてゐる。たゞに御身

等のみのごとではない。しかも世に時めいてゐる成功の人は、十中八九まで、同じ逆境に苦しめられ、同じ貧窮に悩まされて來たのである。たゞにカーネギーやロックフェラーあるのみではない。製絲器械を發明して紡績工場の鼻祖となつたリチャード・アークライトの前身は、そも何者であつたか、賤しい散髪屋の子ではないか。羅馬法王グレゴリ七世の前身は、そも何身であつたか、一木匠の子ではなかつたか。米國大統領ガーフィールドの前身は、そも亦何者であつたか、河舟曳の子ではなかつたか。伊藤博文は足輕ではなかつたか。二宮尊徳は、水呑百姓の子ではなかつたか。其他北條早雲は放浪兒であつた。日蓮は屠者の子であつた。賴朝は流罪の身であつた。清盛は「伊勢平氏(瓶子)は、眇(素瓶)なり」と公卿に嘲けられた者の子であつた。もし逆境にあつて歎くものあるな

らば、靜に考慮して、彼等の成功せる所以を見るがよい。吾等は、斯の如く信ずる、「逆境にあつて、これを利用するの勇なきものは、成功を望む可からず、禍を被つて、これを轉じて福となすの力なきものは、成功を期す可からず、艱苦を忍んで、平然たる度胸なきものは、又成功を夢みる可からず」と。

見よ、フアークソンは、スコットランドの高丘に登り、羊皮を被つて、星象を見、以つて天文を學んだではないか。ストーレは、園丁を業として、旅行の暇々に、數學を學んだではないか。ドリコーは、靴を作る餘暇に、生理を學んだではないか。ビーター大帝は、邊地に一時遁れながら、軍隊の編成に腐心してゐたではないか。

二宮尊徳は、山に柴刈りに行く道すがら讀書した。易學の大家高島吞象は、牢中にあつて、これを研究した。岩崎彌太郎も亦獄中

にあつては、算數の術を習つた。網島梁川は十年の病床にあつて幾多の著書を殘した。正岡子規も、亦病床に横りながら、俳句及和歌の革新に従事した。ウイリアム・コベットと云ふ有名な著述家は、かういふことを言ひ遺してゐる、「余昔民間の一兵家であつた時、書齋とする所は、船房の牀端。書篋に充つるものは小袋。卓机として頼む所は、小木枿を膝上に置けるに過ぎなかつた。蠟燭を買ふ金がなく、油を購ふ代がないので、毎晩火を焚く時は、必ずその明りで讀書したものだ」と。逆境に沈倫せる人よ、あれを見、これを考ふる時は、奮起して、健闘すべき勇氣が、自ら湧き上つて來るを感ずるであらう。要は一勇以つて百難に勝ち、境遇を征服して、これを善用するとせざるとに在る。成則の分岐點は、即ちこゝに在る。

吾等は翻つて幸運にしてしかも不運なる富者の兒に告げん。御身等は、人力庇護の中に育つて、外と戦ふこと稀、不便を知ること少いから、勢い勇氣の源を枯渴せしめ、意氣を滅殺して、遂に一介の懦夫となり、凡骨と化し去り易い、成功せんには、極めて危険な、誘惑の多い境遇に起ることを心しなくてはならない。英雄の子に英雄なく、偉人の子に偉人なきは、世上に見る常の例である。「不肖の子」などといふ熟語迄が出来てゐる。頼朝の子に頼家が、あつたが、到底父の足下にも寄れなかつた。京中の者は、「いたく狩を好みて人の歎きをしらせ不給、世の費もかへりみさせ給はず、すべていさむる事を聞き入させ給はず、彌々御前悪しくなる故に、人皆口を閉ぢて、只目出度おはしますとのみ申をき、て、すべて御身のごがをば一つもきかせ給はず、しらせ給はぬ」と囁き合つてゐた。文覺苦

諫して、「殿は、若きより樂たふとく、て、人の歎、民のくるしみをしらでやましまさんと、淺ましく、痛しく思ひまゐらせ候間、いづくへなり共、まれに流しまゐらせて、暫わびしき目をみせ參らせ給へ。それぞいとをししく思給至極後の御樂にて候べきと、故大將殿頼朝には内々申て候ひし也」とまで極言してゐる。もし彼にして、文覺が切なる諫を入れてゐたならば、よもやあの最後を遂げはしなかつたらう。熊澤蕃山も「生れながら榮耀なる者は、おほくは不才不徳にして、國家の用にたちたく候」と言つてゐる。さしあたり秀吉の子秀頼などは、此の部類に入るものであらう。しかし若し御身等にして、發憤激憤し奮起せんか、貧者の兒よりもより早く成功の域に到達し得可き幸運なる境遇に居るのである。成功は必ずしも貧兒の専有物ではない。佛の哲人デカルト、露の文豪トルスト

イ、米のルーズベルト、同じ國の富豪ビヤーポント・モルガンの如き皆御身等と身分を同じくし、地位を等しくしてゐるものである。金力をあてにして、安逸を貪るは、男子の恥辱である。親の努力に依つてなつた財力のおかげで、自己は何等の努力もなさず、遊び暮しに暮してゐるのは、顧みても恥しいことではないか。此の點に至ると、流石は二十世紀のトラスト王と呼ばれるモルガンは偉い。父の財産は、已に數百萬圓に達して、信用の地盤は確然たるものであつたのだが、それには目もくれないで、男らしく次の如うに言ひ放つてゐる、「余はスペイン・サール・モルガンの子として、世に立たんと欲するのではない。一箇獨立したビヤーポントとして、自ら處する計りだ」と。彼の心中には、「ビヤーポントの運命は、ビヤーポント自らこれを拓かんのみ」との凜々しい勇氣に充ちてゐたのだ。

順境と言ひ、逆境と云ふ考へ様によつては果してかゝる言葉に該當すべき境涯が、客觀界に存在するか疑問である。何を以て順逆を區別するか。吾等は、常に境遇論に反對するものである。絶えず運命論に逆つて、戦ひつゝあるのである。境遇は自己の所産である、運命は自己の創作である。順境も然り、逆境も然り。一體艱難とは何か、困苦とは何かと考へるがよい。己が艱難と認むるによつて、始めて艱難となり、己が困苦とするによつて、始めて困苦となつて、我等の前途に現れ、進路に横はるのではないか。己がこれを難と認めず、苦としなかつたならば、難も難ならず、苦も苦とはならないのである。先きに述べた正岡子規は、長年脊髓病で寝てゐたのだが、その日記をみるに、たつた一度しか苦痛を訴へたことがないと云ふ。しかも悠々として俳句の天地に遊び、萬葉古歌の

氣分を味つてゐたのである。難をして難たらしめざるは、これ何の徳ぞや、苦をして苦たらしめざるは、これ何の徳ぞや、智か、才か否々、勃々たる勇氣の徳である。スマイルス翁に聴くがよい、彼はかう言つて教へて居る。「艱難は無氣力の人を脅嚇することが出来るが、勇氣敢斷の人には、たま／＼有益な刺戟を與ふるに過ぎない」と。英雄豪傑、或は偉人など言はれてゐる非凡人の處世の態度を見ると、難路を行くこと、恰も坦途を踏むが如くである。アトビングの口を借りて言へば、「小人は艱難のために屈し、大人は之れにうち勝つ」のである。こゝに於いて知る、順境といふも逆境と云ふも、外の世界にあるにあらずして、自己の心中にあるを。如何に易しき所に置くも、敢爲の勇なき輩は、これを逆境といふであらう。如何に難局にあたらしむるも、勇あるものは、敢てこれ逆境と云は

ぬであらう。人生もど白紙の如きもの、これを縁と見て樂むも、これを黒と眺めて悲しむも、勇の大小によつて分れるのだ。起死回生は、寶丹の効能ではなくて、實に勇氣そのもの、特效である、靈妙なる効驗である。故に「艱難汝を玉にする」といふ格言も、勇者に於いてのみ眞理であつて、怯者に對しては、眞實ではない。馬の耳に念佛も同然であるからだ。

自信と剛勇

運命や境遇に罪を被せないで、よろしく赤手以つて回天の事業を成すべきである。而してこれを爲すには、強い自信がなくてはならない。加藤清正がある時、臣下の者共に言つた面白い話がある。丁度先に例としたピヤーボント・モルガンの言に似てゐるが大體かういふ意味のことである、

「予は、民間の一賤夫から身を起して、太閤殿下の御知遇を蒙つて、今日あるを致し得たのだが、予を知らぬ者は、仕合がよい故このみ思ふであらう。併し余は、今にもあれ、家隸郎黨もなく、朋友もなく、家財器物も、もたぬ素裸の下帯一つの身となつても、自分の器量だけのことはし得ると思ふ」と。

人並勝れた非凡人は、すべて皆かうだ。彼は、今吾人が縷々として述べ來たつたことに、立派な奥書を與へて呉れた。「仕合」なる運命を斥け、頼よるべきあらゆるものを否定して、自力一つで遂行し得るといふのだ。凡夫凡俗のまゝで夢死したくないならば、宜しく裸一貫になつて、大手を振つて、一世を渡る勇氣を出すがい。諸君が外的の何ものかに依據してゐる限り、諸君は斯の如き勇氣の自己の心中にあるを知らないであらう。須らくあらゆるものを棄て、下帯一つになるがよい

勇は自信によつて起り、自信は勇によつて行はる。自信に勇であるならば、例令失敗しても、挫けることはない。例令蹉跌しても、意氣沮喪することはない。必ずや捲土重來の擧に出で、飽迄成功の彼岸に達せんと努めるであらう。勇氣の前に出ては、失敗の悪魔も顔色がなない。失敗を恐れる者は、自信に勇でない臆病者か小膽者である。失敗が恐しいやうでは、成功は覺束ない。失敗と成功とを二つ並べて見ると、兩極端に立つて、各相容れざるものゝ如くに思はれるが、實はそんなに距離の隔つたものではない。失敗と成功とは親類である。失敗は成功の一部分である。何となれば、失敗に教へられて、始めて成功に近き得るからである。然るに失敗の前に慍伏し、再擧の勇なければ、何日の日か、成功に見えん。

一度失敗することは、一步成功に近寄つたことである。十度失敗することは、十歩完成に接近したことである。言はずや、「失敗は成功の母なり」と。味ふ可き教訓である。

日本の銅山王と稱された故古河市兵衛は、澁澤男の言葉によると、「鑛山にかけては、古河氏は、實に非凡な能力を持つて居た。無學ではあつたが、鞏固な自信力を備へて、唯だ一心に之れに従事しあらゆる方面に手を出した。また古河が微々たる間であつた。……中略……或る銀山を買入れたことがある。此時も銀行に融通しろと言つて來たが、私は鑛山は危険な事業である。餘り手を伸ばさぬやうにしたがよいと言つて、懇々中止する様に勸告したが聽かぬ。結局五萬圓ばかり融通した。處が此の鑛山は全く見込外れで、何にもならぬ。大損をした。其の時私はそれ見た

ことか、あの時にあれ程戒めた私の言を聽かなかつた爲に斯様な事になつたと言つて語つたことがある……中略……大抵の人は失望してしまふ。然し古河氏は、平氣なもの、少しも動じなければ心配もせぬ。而してそんなことを言つても無理です。地中に埋藏してゐるものを掘り出すのです、時に鑑定違のあるのは、止むを得ません。運が悪いので外れたまで、此様なことで失望するやうでは、到底仕事は出來やしませんと言つて平氣なもの、私も成る程と言つて、別に咎めもしなかつたが、鑛山事業にかけては、大膽で勇氣のあつた、珍らしい男であつた。

これを過去の歴史に見るに、大成功をした人は、屢々失敗を反覆してゐる。失敗するのが名譽ではないが、敗れても挫けず、自信に勇なるは尊ぶべきである。漢の高祖の如きは、連戦連敗、七十二度

も敗北したといふではないか。家康もよく負けた人である。リットンも失敗した、しかし挫けず撓まずして、遂に大名をなした。デズレーも失敗したが屈しなかつた。足利尊氏も數々敗れた。正成義貞に敗られたことは云ふ迄もなく、新田義興と武藏野に戦つて大敗したこともあれば、家來たる高ノ師直に、その邸宅を十重二十重に圍まれたこともあるし、弟の義直に負けて、坊主になつて詫をしようとしたことさへある。が幾ら負けても、痛いとも、痒いとも感じなかつたらしい。膽勇の傑れた人であつたと見える。「御心強くして、合戦の間、身命を棄て給ふ可きに臨む御事、度々に及ぶと雖も、命を捨て、畏怖の色なし」と、夢窓國師が梅松論で褒めてゐるさうだ。頼朝も擧兵の第一發に、石橋山できつ先を挫かれたが、彼の勇と膽とは、彼を安房に拉して、二度の旗を擧げさせた。石

田三成は、關ヶ原の一戦に、惜しい敗をしたが、直に刀を腹におしあて、命の安賣りをしはしなかつた。暫し膽吹山に潜伏して、稻の落穂を拾つて、纔に餘命を持してゐた。これを怯夫懦夫の行爲と評するは、未だ武士道の神髓を解せざるものである。彼は如何なる苦勞を凌いでも、逃げるだけ逃げおほせて、大阪に走り込み、再擧して敵に報いんどの積りであつたのだ。大勇がなくては、到底も出來ない努力である、奮闘である。一度や二度の小失敗に、或は意氣銷沈したり、或は自暴自棄になつて、自ら破滅を招く輩には、夢想も出來ない。「失敗するも屈することなく、常に進んで止まざる人は、予が深く望を屬する所である。一試して功をなし、浮泛して、定まらざる人に比ぶれば、遙に優つてゐる」と、フォックスが言つてゐる。

以上列擧した人物が、失敗に對して取つた態度は、大勇以つて敗に恐れざることその一、最後の勝利を信じて、自己の力を信じて、途中の區々たる成敗を度外視したる膽勇その二、持久耐忍して初志を翻さざる忍苦の勇その三である。都て甲が乙よりもよりよく成功する所以は、天賦の才能が、他に優つてゐる譯では無くて、萬難に當つて屈せず、よくその初一念を貫徹せずんば止まぬ勇氣に基くのである。人の曰く、「天賦とは大忍なり」と。

失敗に際して最も大切なるは、必らず成功すべしとする自信と、最後迄自信を一貫するの勇氣である。休まず、急がず、撓まず、屈せず、受け耐へつゝ、次第に盛り返へす勇氣である。佛軍が首都巴里に退いて、破竹の勢で押し寄せて來た獨軍をよく喰ひ止め、遂にこれを撃退した力は、今歐洲で褒めはやされてゐる。劍の峯で踏み

止まつて、ひり／＼と押し返すことは、餘程の大力士でなくては出來ない。餘程度胸の据つた勇者でなくては叶はない。周章てツツチャルが如きは、危い手管である。絶體絶命の捨身の業である。絶望の勇である。

忍耐と克己

トルストイの童話に、「イワンの馬鹿」といふ面白い話がある。兄や姉が都會に出て、華な生活をしてゐる時、豊で啞で馬鹿のイワンは、ケチな田舎に残つて、孜々として野良仕事に精を出してゐる。廳で都會に出た兄や姉が失敗して、厄介になりに来る。横柄な面してイワンをこき使ふ。が、イワンは、親切に世話をしてやる。と一方では、この忠實なイワンの邪魔をしてやらうと、悪魔の王が、小鬼三人を遣つて、畑を荒させる。折角耕しておいたのが、一夜の中

に散々荒されてゐる。けれどもイワンは、黙々として鋤を取り、再び耕しにかゝる。幾ら小鬼が邪魔をしても、一向効果がない。怒らさうとしても怒らない。到頭小鬼も、イワンの辛抱強いのに、我を折つて、ほうくの態で逃げかへると云ふのが其の梗概である。

實に悪運に打ち勝つものは、忍耐の勇である。俗諺にも「石臼は石でも、心棒(辛抱)は金(金錢)ぢや」といふがある。徳川家康も遺訓の中に、「人の一生は、重荷を負うて、遠き道を行くが如し、急ぐ可からず」とか、「堪忍は無事長久の基、怒りは敵と思へ」など、いつてゐるが、蓋し是は彼が一生のモットーであつたのだらう。彼は幼時今川義元の許に人質となつて行つてゐた。その苦勞がすむと、隣に信長といふ大將が現はれた。北に武田家を控へ、東に北條の一族を控へ、その中で微々たる岡崎の一城を保つてゐたのだ。その信

長が案外早く死んだだけでも、天下はまだ取れない。秀吉といふ不世出の豪傑が、頭上に立つてゐる。其間に彼はちり／＼と地盤を堅め、徐に勢力を養つてゐた。江戸城に移つて、關東八州の地を事實に於いて掌握してゐる。次いで秀吉が死んだ、天下は今こそ彼の頭上に落ちて来た。が、それでも彼は起たない。はやる心を抑へ／＼して、時の來るのを待つてゐた。前田利家といふ傑物が、鋭い眼を見開いてゐたからだ。これでよしと起つた時は、戦はずして、彼はもう天下を取つてゐた。だから日本歴史上で、彼程樂に天下を掌握したものはないやうに見えるが、それは表面の觀察で、裏面に入つて見れば、これだけの忍耐が働いてゐたのである。忍苦、忍耐は常に人を安全に導く。淀君にしてもさうだ、家康已に老體に及びたれば、餘生長からざる可し、暫く忍んで、要求を容れて行き

たまへと言つた片桐且元の言に従つて居つたならさうは安々と天下を失ふ憂はなからう。大事をなさんと欲すれば、大忍を以つて、難に堪へなくてはならない。急いで満足な成功が出来るものでない。よく進む者は、また退いて堅く守る勇氣がなくてはならない。成功には、此の二面の勇氣が必要である。蔚山に籠城した加藤清正に忍耐の勇なく、義経流に短兵急に攻めて出たならば如何であつたらう。忽ち包圍されて全軍は塵殺にされたらう。雪に閉されて後援續かず糧食絶え、將士饑寒に指を落すといふ悲境にあつて、彼はウシと堪へて降らず、折々夜襲を試みて、奇勝を博してゐた。彼が慶長三年正月一日、筑前中納言と安藝宰相に宛て、送つた手紙の中で、かう語つてゐる。「兵糧無之候て、數日を送り候故、敵陣を切り立て候事も難成候。併し夜かせぎの儀、夜襲は夜々

仕り、勝利を得候。當城御普請今少し不出來に付而、兵糧丈夫に入置候。其内御加勢も難成候に付而は、各々其の覺悟仕り候間、可御安心候云々」と。即ち彼は異域の孤城に在つて、よくこれを死守した。進むに強く、退くにも強い名將である。

此道理は個人の人格の修養上に見ても同じことだ。近頃は物質文明の進歩に刺戟されて、皆落着を失つてゐる所爲か、何事にも速成が尊ばれて、東京市中到る處に速成何々の怪しげな看板を見受ける。腕を練り、技を磨くといふことを忘れて、早く飯にありつかうとするのだ。が天は公平無私、一の努力に對しては一の報酬。十の努力には十の成功を與へる。速成は到底晩成の敵ではない。桐の木はすん／＼生長するが、目が疎くて、質が柔く、枝は脆くて折れ易い。樅の木はなかく／＼太らない。が目が細くて、質は石の如

く、鐵の如くに堅い、容易に折れない。これを一本の木に就いて見るに同じことだ。『一年にして之を伐れば、則ち薪蘇を給するに足るのみ。二年にして之を伐れば、則ち桶をなすに足るのみ。五年にして之を伐れば、則ち柱をなすに足るのみ。十年にして之を伐れば、則ち始めて棟となすに足る』のだ。大器たらんと欲すれば、晩成を期しなくてはならない。大に活動せんと欲すれば、大なる素養を蓄へなくてはならない。晩成を期すれば、難に會ふこと多く大なる素養を蓄へんとすれば、苦しむこと多きが故に、よく耐へ、よく堪へなくてはならない。耐へがたきに耐へたるときは、非常に愉快を感じるものだ。鬼の首でも取つたやうな嬉しきがある。例へば悪い習慣をなほすとす。これは非常な難事である。非常な苦痛である。何となれば、全く新らしき人間に生れかはるこ

とであるからだ。しかし苦しみながらも、見事に矯正したときは天地に光が満ち、天下の諸鳥一齊に歌ふが如き快樂を感じる。よく忍び、よく耐へ得るものゝみが感じ得る独自の境である。これを以てこれを觀れば、苦に耐ふるといふことは、進んで苦を排除すると同じ結果を齎すのである。

『急げば事を仕損じるといふことがある。功を急ぎ、名に戀々たれば、目的のために手段を擇ばずといふ態度になり易い。手段の如何を顧みずして得た成功が、如何程の満足を我に與へるか。不正にして得たる榮華は浮雲の如きものではないか。東方の君子は、『渴しても盜泉の水を飲まず』ときつぱり言つてゐる。節を守つて死ぬ勇氣がなくては、言ひ得る言葉ではない。君子即ち人格の士に、安じて『以つて六尺の孤を託すべく、以つて百年の命を寄す

べきは「節に臨んで屈せざる勇氣があるからである。此の勇氣が積極的に發現すると、自己の主張となり、消極的に發現すると自己を守ることになる。前者は主義主張を貫徹することであり、後者は義を守つて屈せざることである。即ち西洋流に言へば、「正義」を命として、生死を共にすることである。君子即ち今の紳士たらんとするものにして、此の勇なくんば、立派な學問も何の用をなさず、高尚な人格も何の光を放たず、敢て凡人と異なる所なきに至る。今かりに甲なる兇漢がゐて、乙なる人間を殺さんと欲し、しかも自ら下手人たることを好まず、丙なる人間に向つて、汝我に代つて、乙を殺せ、若し命に従はずんば、我汝を殺さんと脅喝したとする。若し丙に正義を守つて、死すとも破らぬ勇がなく、唯々諾々として命に應じて殺したとすれば如何。法律は情狀酌量を以つて減刑す

ると雖も、而も罪人なることは免れないのである。何となれば、丙には命に従つて自己の生命を安きに置くか、命を拒んで自己を犠牲に供するか、二者の中一を選択する心の餘裕があつたからである。彼は恐らく前者を取るの得なるを思つて、乙を殺し以つて自己の生命を助けたのであるが故に、全然嫌々ならしたといふことは出来ないものである。彼は己に克つ勇氣がなかつたのである。彼は義に殉ずる勇氣がなかつたのである。「忠臣は二君に仕へず、貞婦は二夫に見えず」と云ふことも、その根本の精神は、義を守つて破らざる勇氣に在る。これなき者は、醜を後世に遺し、これあるものは、芳を千載に匂はす。前者に多野九郎兵衛の如きあり、後者に大石良雄の如きあり、和氣清麿の如きがある。更に古にこれを求むれば、耻を朝鮮に晒した河邊瓊岳の如き、破廉無耻の徒があれば

敵將の前で禪を脱して臂を向け、「新羅王我が臂肉を食へ」と豪語した伊企難の如きもある。近く下つては、大鹽平八郎の弟子宇津木敬造といふが如き硬骨漢がある。彼は師匠大鹽より大阪旗揚げの一議をうち明けられたとき、何んと勧められても頑として與みせず、遂にこれを諫止しようとした。大事の秘密を聞かされたのだから諾ねば、自己の生命の危い位は、固より承知だが、節を守つて、敢て顧みなかつた。その時、彼は決死の書状を家に送つて曰く「四ヶ年以前師弟の契約仕候大阪天満の與力大鹽平八郎方へ着仕候。久々にて面會致候處、如何なる天魔の見入候哉、平八郎存外の企有之、明十九日大阪町奉行を討取り、其上市中に放火致し、君を誅し民を弔ふ杯と全く謀反の企にて、私荷擔可致旨強て申聞け、種種諫言致し候へども、申出候事返さぬ氣象故、容易には承知仕る間

敷と存候。併此儘見捨私歸り候ては、武士道相立不申、且其上如此大望を明し候平八郎に候へば、私不承知の上は、生きては返し申間敷と被存候。乍去荷擔候は、第一御家の御名を穢し、忠孝の道に背き候。去りて師を見捨候ては、信義相立不申、無據一命を差出し、今夜平八郎始め徒黨の者へ利解申聞忠孝信義相立候様仕度奉存候間、何卒重而恐入候儀に御座候へ共、御前萬端宜敷御取繕奉願上候云々」と、猶末筆に持つて來て、「大阪騒動と御承知被下候は、敬治は相果候儀と思召可被下候」とある。徳川十四代の將軍家茂の室に靜寛院といふのがあつた。元は和宮親子内親王と申した方である。この方が、明治元年十五代將軍慶喜の哀訴狀に添へて志女士御門藤子を使とし、禁中へ差出された書面がある。中に「叡慮の程伺不申願出候も恐入候へ共、心痛に堪へ兼願上こゝろみ參

らせ候。去る三日召に依り慶喜上洛の處、不慮之戰爭に相成朝敵の汚名を蒙り候間一先歸府の處、徳川征伐の爲、官軍差向けられ候やに承り、當家の浮沈此時と心痛致し參らせ候。……中略……此度の一件は兎も角慶喜是まで重々不行届の事故、慶喜一身はいか様にも仰付られ、何卒立行候様幾重にも願度、後世まで當家朝敵の名を残し候事私身に取候ては實に殘念に存じ參らせ候。何卒私への御憐愍と思し召され、汚名を雪ぎ家名相立ち候様、私身命にかへ願上參らせ候。是非々々官軍差向けられ御取つぶしに相成候は、私事も當家滅亡を見つゝながらへ居様も殘念に候まゝ、屹度覺悟致し候所存に候。私一命は惜み不申候へ共、朝敵と共に身命を捨て候事は、朝廷に恐入候事と誠に心痛致居候云々」と述べてある。女は「……に家なし」といふ時の道德に遵據して、一旦御降嫁に

なつた徳川一家を我が家として、一族全體のために飽まで義を死守せんとせられたのである。女性ながら男子も及ばざる凛とした勇氣が偲ばれるではないか。正義に基く勇氣は、永久の生命を生む。遺芳を千載の後に残すは、ピラミッドではない、大佛ではない。義勇に伴ふ壯烈な行爲である。かくの如きは、よく己に克つものでなくては、どうして出來よう。己に克つ勇氣なくんば、道德を行ふこと能はず、國法を守ること出來ない。否々、自ら作つた禁誡も實踐躬行すること能はずして、自らこれを破つて、悶々としなくてはならない。さればクリストも、怯む心を引き立て、「若し爾の手爾の足己を礙かさば、斷りて之を棄てよ。兩手兩足ありて盡きざる火に投入られんよりは、跛または殘缺にて生に入るは善なり。もし爾の眼己を礙かさば、拔出して之を棄てよ。兩眼あり

て地獄の火に投入られんよりは、一眼にて生に入るは善きなり」とまで激語してゐる。修養のためには、死も厭はぬと云ふ大勇猛心の叫びである。クリスト教的に言へば、天なる父の命を信じて、絶對的に服従する勇氣である。父の命を墨守して、死すとも破らぬ勇氣である。即ち知る、克己の勇は、自己の良心の聲を傾聴して、敢て悖らず、拳々服膺することに依つて生ずと。我は唯これによつてのみ、惡を斥けて、惑しの術のうち勝つのである。たゞこれによつてのみ、邪念妄想を消散せしめ得るのである。四肢五官は、どうも心のいふことを聞かない。心が右と命じても、足は左に進む。心が取るなど言つても、手は取りたがる。自分で自分を満足に支配することが出来ない。自分で自分の四肢五體を自由に驅使することが出来ない。己に克つ勇が足りないからである。諸君は

將來頭に立つて天下に號令せんと欲してゐるだらう。男子の本領は、命令する所にある。縦令天に號令しなくとも、一會社一商店の重役となつて、人を使はねばならない。縦令重役たらずとも一家の命令者たらねばならない。人を支配するのが男子の天職である。然るに自分で自分を満足に支配することが出来ず、我が身を自由に使ひ得ない者が、どうして他人を支配し驅使することが出来るか。人を使はんと欲すれば、己を使はねばならない。自己を十分に支配し得る人のみが、眞に人を支配し得る。されば將來大になすあらんとする青年は、須らく克己の勇を修養して、自己制御に慣れなくてはならない。

四 冒險と蠻勇

人生と冒險

科學の力は、刻々に自然界を征服してゐる。昨日の不可能も、今日は可能たらんとしてゐる。天狗やエンゼルやを作つた昔人の夢想は、今や飛行機となつて、天國ならぬ現實の大空を飛翔してゐるではないか。人智は日々に進歩して、未知の世界を照破してゐる。昔の神秘は、今の神秘ではない。不思議の數は、次第に減少して行く。恐るべきものは、追々消滅して行く、氣強いことである。しかし乍ら確知することの出来ないものがある。科學が如何に發達しても、知識が何程進歩しても、測ることの出来ないことがある。それは「明日」である、「未來」である。天氣豫報は出來てもそ

れに依つて明日の人事を今日に豫知することは難しい。一切の宗教、一切の科學は、皆此の「明日」なるものを、今日に於いて確知せしめんとする努力の發現である。常識は「明日」に向つて「だらう」と言ふ。科學は「然かあるべき筈だ」といふ。しかも何物にして「である」と未來に向つて言ひ放つことは出來ないのである。成る程、ある程度までは豫測し、豫知して、準備にかゝることが出來ないではない。けれども豫測は所詮不適確たることを免れない。何となれば、今日に於いて、明日を豫測する基礎たり材料たるものは、昨日の事實にあるからである。過去の事實が、そつくりそのまま將來に於いて、再び起ると云ふことは期し難いのである。故に我等の知り得る範圍は、僅かに過去と類似せる未來の一部分に過ぎないのである。早い話が、獨逸である。今度の大戰争を買つて

出たのは獨逸で、彼には十二分の用意と計畫があつたに違ひない。英國の雜誌によると、一昨年さくねんの九月一日に巴里を陥れ、十月一日にワルソーに入城し、轉じて直ちに英帝國を衝く筈であつた。それが戦争前に於いて、經驗ある將軍や軍事に明るい參謀達が鳩首して立てた策戰計畫であつたのだ。一國の運命を賭する大事な戦争であるから、慎重の上にも慎重の態度を取つて畫策したに違ひない。合理的な獨逸人が、慎重の態度を以つて、科學的に割り出したこの計畫でさへも、事實に於いては、そつくりそのまゝには實現されないのである。伊太利も必ず戈を取つて味方するに違ひない、日本も間接に味方するに定つてゐると豫想してゐたのだが、事實は案に相違の態である。これによつて之を觀れば、豫想豫測の知識は、深く信頼するに足らないものである。この意味に於いて

人生の事、概ね一種の大なる冒險と言つてよい。

「板一枚下は地獄」といふ譬がある。これは變化窮りなき天候の下で、海上生活をしてゐる船頭の危険と不安を言つたものであるが、直に移して以つて人生の譬諭とすることが出來よう。我等は皆板一枚に乗つて大海を渡つてゐるのだ。不測の難は、何時身に降りかゝるかもしれない。刻々に死し、刻々に生きてゐる我等は、吐く息、吸ふ息にさへ、戰慄すべき危険を感せずにはゐられない。「夫、人間の浮生なる相をつらく、觀するに、おほよそ、はかなきものは、この世の始中終、まぼろしの如くなる一期なり。さればいまだ萬歳の人身を受けたりといふことを聞かず。一生過ぎやすし、今に至りて、誰か百年の形體をたもつ可きや。我やさき人やさき、今日とも知らず、明日とも知らず、後れ先きだつ人は、もとのしづく、未

の露よりもしげしといへり。されば朝には紅顔ありて、夕には白骨となれる身なり云々』とは、蓮如上人が御文章の一節である。此の意味に於いて、生きるといふことが、已に一ケの冒険である、危険である。

しかも此の危険、此の冒険の中にあつて、悠々と暮してゐるのは如何なる譯か。『一寸さきは闇』の中で安じて生活してゐるのは、果して何によつて然るか。何も依據る可き他力はない。唯自信自恃の自力あるのみである。然らば自信の依據する所は何か、神か佛か、梵天か。否々、たゞ一つの生の力である。玄妙靈妙なる生存力である。これさへ信じて居れば、恐る可き何物もない。此の力は、あらゆる人間に具つてゐるが、しかしこれを意識し、これを認知するものにあらざれば、其働きを現はすことが出来ぬ。釋迦基督

などが、その最も偉大なる意識者である。佛といひ、神といふも、畢竟自己自身に具はれる天賦の力に外ならない。さりながら、例へば、此の力を具備せるものと雖も、その力の偉大なることを信せざれば、何の用もなさない。寶の持ち腐れである。百萬の富も、これを使はざれば、瓦石に等しきと同じだ。されば親鸞も、クリストも、口を酸くして『信せよ、たゞ信せよ』と教へてゐるのである。何となれば、信は最も大なる勇の源泉であるが故である。彼が『南無阿彌陀佛』と叫ぶ時、彼が『アーメン』と祈る時、彼等の心中には、何物もうち勝ち難き力と勇氣が滾々として湧き出てゐるのである。これがあるが故に、よく彼等は生死の難渡海をも、平氣で渡り得たのである。耶蘇がある時、小舟に乗つてガリラヤの湖水を渡つてゐたが、天俄にかき曇つて、颶風忽ちに起り、アワヤと叫ぶ違もなく、舟は今

にも覆りさうになつた。が彼は何も知らざるものゝ如く高軒かいて寝てゐた。ところが弟子達はうろたへ騒いで、「主よ、救ひ給へ、我等亡びんとす」と揺り起した。すると彼は、「汝等信仰薄き者よ、何をか懼るぞ」と戒めた。弟子の多数は、ガリラヤ湖畔の漁夫、水に生れて水に育つた河童のやうな連中だ、然るに水に明るい彼等が周章狼狽し、山に野に修行して、水に暗い耶蘇が、却つて泰然自若としてゐたのは、そも何の力か。自信の力ではないか。自恃の勇ではないか。我に此の信あり、我に此の勇あるならば、狂亂怒濤も敢て恐るゝに足らない、言はずや。「心體光明なれば、暗室の中に青天あり、念頭暗昧なれば、白日の下に厲鬼を生ず」と。心に恐れあれば、平なる道も、足下に波うつて歩くことは出来なからう。心に怖氣あれば、我が家に入ることも出来なからう。

「頼朝、石橋山に死んだとは虚報なり、彼房總の地を徇へ、勢隆々たり、豆、駿、甲、信皆風を見て至り降る。今にして制せずんば、撃つ時なからむ」との報を得た清盛、大に驚き、おのれ猪口才な頼朝、一蹴りして蹴り破つてくれんと、右近衛權少將平維盛を大將とし、忠度、知盛を副將とし、兵五千を授けて、遠征せしめた。

平家の軍、駿河に至り將に足柄を踰えて大舉殺到せんとした。が勸むるものありて、富士川の西岸に陣を張つた。こなたは源氏頼朝を總大將として、二十萬の兵が、東岸に陣を張つて、今度こそ會稽の耻を雪ぎくれんと構へてゐる。富士川の流れ滔々として、夜陰に響き、篝の火焰々として天を焦してゐる。時々河を隔て、嘶きかはず軍馬の聲、勇んで嘶くは源氏方か、怯えて嘶くは平家の方か。天は黙々として、兩軍の勝敗を見てゐる。時に忍びやかに幕をた

ぐつて現はれた東岸の武士、平家の陣屋を見て、暫し凝と耳を澄してゐた。詩を朗吟する雅な聲、妓の笑ひ興する聲が、水音の中から微に聞える。やがてそゝくさと件の武士が去つた、と間もなく一軍の兵、足音を盗んで、窃に河岸に近寄つて行く。すると靜に眠つてゐた水鳥は、俄の人出に驚いて、啼きつ叫びつ、我勝ちに羽音も荒しく亂れ飛んだ。さアこれを聞いた平家の軍は吃驚した。それよ源氏が夜襲と、一つの鎧を奪ひ合つたり、綱も解かずに馬に乗つて鞭うつといふ大醜體戰はずして自分で陣を崩してゐる。大將達の軍令も聽かばこそ、我一に逃げようとうろたへ騒ぐのみだ。時は今ぞ逸するなかれと、平家の本陣維盛の陣に向つて、短兵急に攻め寄せたは、件の武士武田信義であつた。續いて畠山重忠を始めとし、源氏の諸將ひた押しに押し寄せて、散々にうち惱ました。

二十年の都生活に、風流韻事を事として、武を練り、勇を養ふことを忘れた平家の軍は、耻しくも群鳥の驚起に膽を冷して、脆くも一敗した。

「幽靈の正體見たり、枯尾花」

で、總じて臆病とはこんなものである。自ら信ずる念薄く、従つて勇氣にも乏しきが故に、進んで當ることもせず、手に取つて見ることもせず、たゞ遠くからこはい恐しいと震へてゐるのだ。「案ずるより産むが易い」で、實地に當つてみれば、却つて餘りの容易さに驚くことが多い。平生の心がけさへあれば、智は事にあたつて生ずるものだ。またそれが最も役に立つ眞の知識である。豫知豫測は、案外あてにはならない。然るに臆病者は、あてにもならぬ此の豫測の知識で、物を見ながら、自ら兎や角やと案じてゐるのだ。故

に臆病は豫感であつて、實感ではない。苟くも事を成さんとする青年は、須らく人生は總て一種の冒險なりと覺悟して大に奮闘する勇氣を持たねばならぬ。

冒險と蠻勇

闇の前にあつて戦くなかれ、新しき生活の前に立つて慄ふなかれ。「一寸先きが闇」ならば、闇でよい。我にはこれを照破する力がある。「明日」が解らなければ、解らぬでよい。我には永劫に生き可き力がある。「朝に道を聞かば、夕に死すとも可なり」此の我を惑はす何の惡鬼が居るか、此の力を挫く何の惡魔が居るか。

人生が冒險ならば、冒險でよい。生きることが危険なら、危険でよい。我はたゞ一つの力を信じ、たゞ一つの力に鼓舞されて、幕進するばかりだ。劍の山起らば起れ、我は跳つても行かむ、紙の橋架

らば架れ、我は躓えても行かん。我は五尺の五體に宿つた偉力、唯それを堅く信ずる。それより發する勇氣、我は唯それにすがり寄る。これ程大丈夫な、強い確なものはない。これさへあれば、難も險も眼中にない。見よ、火如何に猛なりと雖も、不動明王の勇に會つては叶はないではないか。奈翁叫んで曰く、「自己に信頼して凱歌を奏せよ」と。

冒險に必要なものは、實にこの大勇である。學問でもない、知力でもない、勇氣である。しかも並々ならぬ大勇氣である。岩崎彌太郎がまだ安積長齊の塾で勉強してゐたころのことだ。一日國元から飛脚が手紙を携へて來た。見れば父彌二郎事役人と事を争ひ、申分相立たず、冤罪を被て入牢の身となつたといふ報知だ。彌太郎は、此の悲報に接して、先づ驚いたが、官吏の暴慢無禮を怒

るの念は、更に甚しく、父の冤罪を救はんと決心し、取る物も取り敢へず、直に結束して、江戸を出立し、郷里に向つた。

馳て東海道第一の難所たる大井川へと差かゝつた。處が前日來の雨で、水嵩増して川止となつてゐた。其頃は川止となつたら幾日も其處に滞留して、川止解除の日を待たねばならなかつた。が歸郷を急ぐ彼には、そんな悠長な手段は取つてゐられない。そこで無理にも渡らうとしたが、河守は何と言つても彼方の岸へ届けてくれない。

見れば、流れはなか／＼急だが、まだ大出水といふ程でもない。よしこれなら渡れるぞと、河守の目の届かぬ處から河端に降りて手早く真裸になつた。止めるなら止めて見よ、必ず渡つて見せるとの勇氣凛たる有様である。

衣服大小を一括にして、これを頭上に縛りつけ、矢の如く流るゝ奔流を物ともせず、ざぶ／＼と踏込んで、丈立つ所は徒渉し、立たざる所は、得意の游泳術で眞一文字に波を分けて進んだ。

すると河番が遙にこれを見て、何でもあれは今の若侍に相違ない、胡亂な奴だ、止めよといふ譯で、大聲擧げて「返れ戻れ」と頻に呼つたが、飽迄剛膽な彼は、水を切りつゝ、「何をいふ」と大喝一聲して、更に見向きもせず、とう／＼難なく向岸に泳ぎ着いた。

彼は此の勇氣でもつて、今日日本一の稱ある三菱の基礎を築き上げたのである。一度意を決すれば、萬難交々起り妨ぐと雖も、それを突き退けて、當初の目的を叶へずんば止まぬ蠻勇家であつた。だから父の冤罪を雪ぎ、牢獄の中から助け出さうとするに方りては、意氣天を衝くの概があつた。堂々として裁判の不公平を詰つ

たのだが、當路の士は、官權に隠れて、是非正邪を明にしない。彼は非常に憤慨して、『官は賄賂を以て成り、獄は愛憎に因つて決す』と役所の柱に大書して出た。これが累を及して、到頭彼も亦牢に入らねばならなくなつたのだが、そんなことは一向意に解してゐなかつた。勇者の眼には、牢獄の苦勞は何でもない。父を救はんと心の前には、鬼も蛇も敢て恐るゝに足らない。況んや入獄の如き一小患は、この蠻勇家の膽をひるませる力がなかつたのである。大倉喜八郎氏にも、『九死一生の冒險談』といふ實話がある。之を左に紹介しよう。

「明治十年、鹿兒島戰爭の眞最中、朝鮮は大飢饉で、韓國政府から我が政府へ米の輸入を依頼して來た。時の内務卿大久保利通は、實際の情誼を重じて、内亂正に酣なるに拘はらず、御用船を貸すから

私(大倉)に日本米を持つて行つてやつてくれとの事であつた。

その時、私(大倉)は戰爭の爲めに九州へ手を擴げてゐたので、なか外へ出て行く違もなかつたのだが、外ならぬ大久保さんの依頼だから、義侠で以つて釜山まで行くことになり、御用船瓊浦丸に乗り、内地のことは手代に委せて一寸出かけた。

處が釜山へ着くと、米の始末に手間取つた爲に、御用船は待つて居られず、私を置去りにして返つてしまつた。次の便船は、今とは違つて何時來るやら見當がつかない。然るに一方には内地の戰爭の模様が氣遣はれてならぬ。

斯うなると、矢も楯も堪らぬ。そこで海邊に出て、廣島歸りの鰻釣船に頼んで、筑前博多まで乗り切つて貰ふことにした。

渺々たる大海に一葉の舟、山は遠く波は穩で誠に乗心地がよい。

それを船頭が掛聲勇しく汗を絞つて漕いで行く、真に愉快である。斯くする内に、その日も暮れて二日目になると、遙に島が見える。アレガ對州だ、アレガ壹岐だと船頭がいふ。さすれば筑前博多も今少しの處だと、心中竊に此冒險の成功を喜んで居ると、好事魔多し、晴天打續いた連日の空も、夕方になつて、俄に一變し、忽ち暴風雨となつた。

「さア暴風雨だ」と、船頭も驚いて帆を卸さうとする。私は先刻から臥てゐたが、いよ／＼荒しと聞いては、ヂツとしては居れない。俄に起つて舟人等と應急手段に取掛る。

「さア生命がけの場合となつた、しつかりやれ」と、船頭に力を添へて、打入る潮を汲出す。其の騒と言へば丸で戦争のやうだ。が幾ら力んだところで木の葉のやうな鰯釣船、天を滔す大浪に漂うて

は争へない。今覆るか、今沈むかと思ふことが、幾度あつたか知れやしない。

「船頭、こゝは一體何の邊だ」と聞くと、解らぬといふ。「さつき壹岐が見えたが、あの方へ向けてやれ」といふと、もう壹岐が對馬でも駄目だ、寅の一點を指して流すより外に途がないといふ。今や百方策盡きて、萬死に一生を僥倖してゐるのだから堪つたものでない。

「船頭、もう此うなつたら仕方がない。寅の一點でも、巽の一點でも關はない。真一文字に帆に委せて走らせる、洲へ乗りあげたら勿怪の幸ひ、岩へ衝突して船が碎けたら岩へ這上れ、運は天だ」と號令して、私は舳に見張り、舟人共は帆尻を抑へて、暴風雨を真艦に受け、行き着く處へ船を向けて、白浪黒濤闘ひ合ふ玄海洋を矢の如く

に走つた。實に危険千萬の話だが、もう生命がけの仕事だ。

船は揺られ、て半日の後、漸くにして陸地を發見したが、それは已に通過した筈の對州であつた。かうして後漸くにして無事に筑前博多に歸り着いたのである。血氣壯な賣り出し頃のことだから、その元氣といふものは、實に凄しがつた。蠻勇と言へば言へもしよう、血氣にはやると言へば言へもしようが畢竟氏に此の大蠻力があつたればこそ、今日の富と榮爵を致し得たのではないか。恐いの怖しいのと辟易みして、常人通りに常道を踏んでゐては、どうして拔群の立身榮達をすることが出來よう、レコードを破らんと欲すれば、須らくレコード以上の猛勇を奮ひ起さねばならない。

吾等はいかに二ヶの實例を引いて、冒險と蠻勇の關係を説いた。

然し乍ら吾等は決してある種の冒險小説、若くはいかゞはしき探險小説に描寫されたるが如き、空想的な冒險を指して冒險といふのではない、又かゝる安價な勇氣を目して蠻勇といふのではない。運を天に委した放業が、必しも險を探り、險を冒すものではない。冒險は、投機ではない。賽を弄ぶことではない。捨ッばちの行爲は、匹夫の勇であつて、眞の蠻勇とは言ひ難い。これを歴史上の事實に就いて見んか。義經の鵜越の逆落しは、確に冒險である。然し無謀の舉ではない、彼は獵師の子鷲尾經春をして、道を案内せしめ、道の難易を聞き質した。

「道などは固よりあらう筈がない。鹿でなければ、獸物でさへ通らない、しかしこんなことに怯んでゐる義經ではない。進みに進んで、鵜越の絶頂に來た、平家の陣は眞下に見られた。一舉して